

二松学舎大学大学院文学研究科・大阪大学大学院基礎工学研究科
株式会社 国際電気通信基礎技術研究所 (ATR)

「瀬石アンドロイド」プロジェクト 2018年度 共同研究報告書



二松学舎大学
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

ATR
Advanced Telecommunications
Research Institute International

Contents 目 次

04	「漱石アンドロイド」運用経緯と研究の動向（2018年度） 学校法人二松学舎 常任理事 西畑 一哉
08	偉人アンドロイドの基本原則 大阪大学大学院基礎工学研究科教授 石黒 浩
10	2018年度研究教育活動の概要 二松学舎大学大学院文学研究科教授 山口 直孝
14	シンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？」 および書籍『アンドロイド基本原則』 二松学舎大学文学部専任講師 谷島 貫太
18	認知科学的観点からみた21世紀の漱石アンドロイド 大阪大学大学院基礎工学研究科特任講師 高橋 英之
20	漱石アンドロイドを利用した授業の試み 二松学舎大学大学院文学研究科助手 伊豆原 潤星 二松学舎大学大学院文学研究科教授 瀧田 浩 二松学舎大学大学院文学研究科教授 山口 直孝
24	漱石アンドロイドとAI 二松学舎大学大学院文学研究科教授 塩沢 一平 二松学舎大学大学院文学研究科教授 増田 裕美子
26	「国語力」をいかに実現するか—朝日教育会議における登壇 二松学舎大学大学院文学研究科教授 山口 直孝
28	「漱石アンドロイドと聞く江戸落語」実施報告 二松学舎大学大学院文学研究科教授 中川 桂
30	仕様と用途—アンドロイドの限界とどう付き合うか 二松学舎大学大学院文学研究科教授 島田 泰子
32	漱石アンドロイドの拡張とその果て 二松学舎大学文学部専任講師 足立 元
34	学生による漱石アンドロイドの運用 二松学舎大学大学院文学研究科助手 阿部 和正 二松学舎大学大学院文学研究科助手 伊豆原 潤星

「漱石アンドロイド」運用経緯と 研究の動向（2018年度）

学校法人二松学舎
常任理事 西畑 一哉



1. 漱石アンドロイドの作成経緯

二松学舎では、創立140周年記念事業として、二松学舎の卒業生であり、2016年に没後100年、2017年に生誕150年を迎えた夏目漱石を、アンドロイドとして甦らせる「漱石アンドロイドプロジェクト」を立ち上げた。二松学舎の卒業生であり、本学が教育目標に掲げる「国語力」の象徴である夏目漱石をモデルに、大阪大学大学院基礎工学研究科石黒浩教授監修の下、漱石のデスマスクや写真等多くの資料を保持する朝日新聞社、夏目漱石の孫である夏目房之介学習院大学大学院教授（アンドロイドの音声を作成するために不可欠な「音素登録」者）の協力を得て、漱石アンドロイドを作成し、2016年12月8日に完成し、披露の記者会見を行った。

2. 2018年度二松学舎内での漱石アンドロイドの活用

（1）授業・式典等での活用

2018年度も、前年度に引き続き、大学・附属高校・附属柏高校・附属柏中学校の学生生徒を対象に、断続的に朗読講義、授業を実施した。

朗読内容としては、当初作成した「自己紹介」、「夢十夜」に加え、「吾輩は猫である」、「こころ」、「坊っちゃん」、そしてかつて漱石が学習院大学で行った講演記録「私の個人主義」もプログラミングした。さらに、国際政治経済学部生用に渋沢栄一の「論語と算盤」の解説も作成している。

さらに、2018年4月の二松学舎大学入学式、2018年9月の二松学舎大学附属柏中学校・高校の始業式、同じく9月の二松学舎大学附属高校創立70周年記念式典においても、漱石アンドロイドが記念スピーチを行った。

（2）漱石アンドロイドサークルの活動

2018年度は、学生サークル「漱石アンドロイドサークル」の活動が活発化した。年度初より、アンドロイド操作の習熟に努め、学生サークルメンバーのみによる操作・運用が可能な体制を築きあげたほか、11月3日の学園祭では、漱石アンドロイドサークルの主催で、和服姿の漱石アンドロイドが、落語についてのコメントを行い、学園祭を盛り上げた。

3. 外部との連携での活用 1・・漱石アンドロイドシンポジウムの開催（2018年8月26日）

2018年8月26日に、二松学舎大学で、「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか——偉人アンドロイド基本原則を考える」とのテーマでシンポジウムを開催した。シンポジウムでは、世界的な劇作家の平田オリザ氏作・演出のアンドロイド演劇『手紙』が初演された。『手紙』は、夏目漱石（漱石アンドロイド）と正岡子規（青年団の井上みなみ氏）の対話により進行する劇で、多数の来場者に感銘を与えた他、NHKや各新聞社でも数多く報道された。

シンポジウムでは、その後、漱石の孫である夏目房之介氏、著作権の第一人者である福井健策弁護士、アンドロイド研究者の大阪大学大学院基礎工学研究科の石黒浩教授、前出の平田オリザ氏に二松学舎大学の研究者が加わり、夫々の観点から、アンドロイドの持つ人格権等について多彩で、深い議論を繰り広げた。このシンポジウムの議論の様子は、その後「アンドロイド基本原則」（漱石アンドロイド共同研究プロジェクト編 2019年1月発刊）という著作として結実している。

シンポジウム関連写真

1. 『手紙』の模様



2. シンポジウムの模様



4. 外部との連携での活用 2 ・ ・ NHK番組「天国からのお客さま」への漱石アンドロイド出演（2018年10月20日）

NHKBSプレミアムで2018年10月20日に「天国からのお客さま」という番組が放映された。この番組の中で、漱石アンドロイドは、芥川賞作家の奥泉光氏、作家のいとうせいこう氏に対し、夏目漱石の「文学論」を解説し、難解な漱石「文学論」を解きほぐすという役を演じた。

放映時間は30分弱であったが、収録過程では、3時間に亘り、奥泉光氏、いとうせいこう氏との濃密な議論が展開された。

「天国からのお客さま」関係写真



©NHK／テレビマンユニオン



©NHK／テレビマンユニオン

5. 外部との連携での活用 3 ・ ・ 朝日教育会議2018（2018年10月13日）

2018年10月13日、二松学舎大学で、朝日新聞社との共催で、「国語力」をテーマにシンポジウムを開催、漱石アンドロイドは漱石の「こころ」の朗読を行い、登壇者の議論のきっかけを作った。

朝日教育会議写真



また、2019年1月23日には、私立大学協会の招きで来日した韓国大学法人協議会のメンバーを対象に漱石アンドロイドによる講演を実施した。

以下、漱石アンドロイド活動状況など、と報道・テレビ・取材・出版関係一覧、画像（動画）提供一覧を添付する。

2018年度 漱石アンドロイド活動状況など

目的	月	日	時間	訪問施設・内容など	場所
大学入学式	4	2	10：00～	祝辞	中野サンプラザ
全国大学国語国文学会	6	2	午後	自己紹介など披露	九段1号館
テレビ収録	7	31	午後	「天国からのお客さま」収録	神奈川
夏休みこども研究会	8	4	午後	『坊っちゃん』朗読など	柏キャンパス
シンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？」		26	10：30～	漱石アンドロイド演劇『手紙』メディア向け披露会	中洲記念講堂
			13：00～	・漱石アンドロイド演劇『手紙』上演 ・シンポジウム（講演、討議など）	
附属柏中高始業式	9	1	午前	自己紹介など	柏校舎体育館
テレビ収録		9	早朝～	「天国からのお客さま」収録	都内某所
附属高校70周年記念式典		21	10：00～	祝辞	共立講堂
朝日教育会議2018 グローバル社会を生きるための「国語力」	10	13	13：00～	『こころ』朗読	中洲記念講堂
創縁祭（学園祭）	11	3	16：30～	漱石と落語（講話）	中洲記念講堂
松山東高校 同窓会	12	15	13：30～	自己紹介、『坊っちゃん』『夢十夜』朗読	中洲記念講堂
韓国大学法人協議会	1	23	午後	自己紹介、『坊っちゃん』朗読など	11階会議室
寄付者向け講演会	3	16	13：30～	自己紹介、『こころ』朗読など	中洲記念講堂

2018年度 漱石アンドロイド報道・テレビ・取材・出版関係一覧

月	日	時間等	新聞社・テレビ局等	タイトル等	内容
8	27	5時台、7時台	NHK	「おはよう日本」	アンドロイドの人格権を考えるシンポジウム開催について
10	20	20:00～22:00	NHK-BSプレミアム	「天国からのお客さま」	「文学論」講義
11	3	朝刊	朝日新聞	採録	朝日教育会議2018開催 「グローバル時代を生きる『国語力』」
2019 1	28		日刊工業新聞社	『アンドロイド基本原則』	漱石アンドロイド研究について、アンドロイドの人格権などを考える

※8月26日開催の漱石アンドロイド関連シンポジウム及び漱石アンドロイド演劇『手紙』披露会の様子は、NHK以外に、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞など中央紙や地方紙にも掲載され、インターネットニュースでも数多く紹介された。

2018年度 漱石アンドロイド画像（動画）提供一覧

月	日	出版社等	タイトル等	発行日など	部数など
5	2	朝日新聞出版	「漱石と朝日新聞」（帯）	6月13日	8,000～10,000部
2019 1	28	NHK出版	こころをよむ『人とは何か アンドロイド研究から解き明かす』	4月1日	ラジオテキストとして販売 (デジタル版にも掲載)

以 上

偉人アンドロイドの基本原則

大阪大学大学院基礎工学研究科

教授 石黒 浩



亡くなった人のアンドロイドを造るというのは、いわばその人の銅像を造るのに似ている。しかしながら、銅像と全く同じではない。アンドロイドの場合は、しゃべったり、動いたりする。そのため銅像以上に造る手間暇がかかるのであるが、一方でそれは非常に人間らしい存在感を持つ様になる。銅像とは比べものにならないくらいに人間らしくなる。

そして、当然のことながら、何をしゃべらせるのか、どのように動かすのかが問題になる。

このしゃべる内容が偏ったり、特定の動作だけを繰り返すようなアンドロイドを造ると、生前のその人の印象とは異なるアンドロイドになったり、ある場面でのその人だけを再現するようなアンドロイドになる。そのために、しゃべる内容や動作は慎重に選ばなければならない。

なぜ銅像は人類の歴史の中で造られ続けてきたのだろうか。その答えは、銅像が動かないことにある。大抵の銅像は最もその人らしい姿形で造られている。そして、その銅像を見る人たちは、その姿形から、その人が何をしてどのように振る舞ったかを想像する。

この想像において人間は多くの場合、ポジティブに想像する。すなわち、その人から聞いた心打つ言葉や、生前に好ましく思っていた動作を思い出すのである。

そして、その銅像が偉人のものであれば、人々のポジティブな想像はさらに高まる。偉人にももちろん、個人的な側面と社会的な側面があり、個人的な側面においては、普通の人とさほどの違いが無いかもしれない。しかし、社会的な側面においては、普通の人とは比べものにならないくらいポジティブで偉大な想像をもたらす。

この偉人の銅像をアンドロイドにするのであるから、その偉大な想像を壊さないアンドロイドにしなければいけないと私は考える。

偉人アンドロイドの製作において、偉人の個人的人格と社会的人格の区別は重要である。人間には常にその二面性があり、偉人アンドロイドの製作においても、そのアンドロイドをどこに設置し、誰と関わらせるのかで、どちらの側面を見せるのがいいかを決める必要がある。

ただ、偉人が偉人と言われる由縁は、家庭のような狭い社会で偉人である訳ではなく、社会の広い範囲において、尊い存在と認識されてこそ偉人である。故に、偉人をアンドロイドにするのであれば、当然その社会的人格をもとに、アンドロイドの発話や動作を設計すべきである。

しかしながら、個人的人格を全く見せないアンドロイドは、果たして人間的であろうか。おそらく答えはNOである。十分理性的に制御された社会的人格は、時につまらなく、まさにロボットのように感じられるかもしれない。

人間が人間に親しみを感じるのは、普段社会的な場面では見せない、個人的な人格を垣間見せる瞬間であろう。それ故、たとえ社会的人格を中心にアンドロイドの発話や動作を設計したとしても、個人的人格も適度に表出させることが望ましい。

個人的人格の再現はどれほど許されるものであろうか。個人的人格、すなわち個人のプライバシーに関わる問題である。

亡くなった人間のプライバシーはどれほど守れるべきなのか、そのプライバシーを守る権利は存在するのだろうか。この答えは専門家に委ねるしか無いのであるが、少なくとも、多くの人が傷つくようなことになってはいけない。

個人的人格の再現がある程度許されたとすると、次の問題は、本当に個人的人格は再現可能なのかということになる。

社会的人格は、偉人であれば、様々な記事や記録が残されており、また、その社会的人格は社会の中で認識されているので、社会の中で様々な人に意見を聞きながら再現することができる。しかし、個人的人格については、それを知るものは家族などに限定される。また、比較的偉人に近いといわれる人が知っている偉人の個人的人格は、単なる噂に過ぎないものも多いであろう。

個人的人格は、本人のプライバシーであるが故に、正確に知ることが本来非常に難しい。もし偉人に直接面会したことのある人間が一人もいない場合は、どうなのだろうか。実際に漱石については、親族を含め直接面会したことのある人はすでにこの世にいない。

社会的人格とはどのようなものであろうか。もう少し考えてみよう。社会の中で多くの人に共有されている偉人の人格は、ほとんどの場合ポジティブなものである。

偉人の社会的人格の場合、その偉人の偉さを正確に判断できる者は、実のところそれほど多くない。大抵の場合は、「他の人が偉いと言っているので、偉いのだろう。」と考えているのではないだろうか。特に偉人の業績が科学的な業績であると、その科学の深い知識が無いと、その偉人の本当の偉さは理解できない。

足りない情報をポジティブに補完するという人間の性質に加えて、みんなが信じていることを自分も信じるという、社会的な性質が重なって、偉人の偉大さは社会の中で共有されているのだろう。

そうして、偉人はその個人的人格を超えて、また時のその業績を超えて、遙かに尊い存在として、社会の中で認知されるようになる。そして、多くの人の心の支えや、人生の目標になっていくのである。

すなわち偉人とは社会の中で、人々のポジティブな想像を喚起しながら、人々の生きる支えになるものであり、偉人アンドロイドもその性質を受け継がなくてはならない。

銅像とは動かない故に、人のポジティブな想像を掻き立てるものである。しかし、銅像ほどに動かないと、一方で無視される機会も増える。存在感が足りないのである。銅像よりも人間としての強い存在感を持ち、人々の注意を引きつけ、しかし一方で人々のポジティブな想像を喚起する、それが理想的な偉人アンドロイドであろう。そして、その偉人アンドロイドは、おそらくは、偉人本人よりもさらに尊敬される存在になると思われる。無論そのためには、非常に注意深い発話と動作の設計が必要になるのであるが。

偉人は銅像になることによって、そのネガティブな印象はいつしか失われ、そのポジティブな印象は、人々の想像をその想像の共有によって、強められていく。それ故、偉人はアンドロイドになることによって、さらに社会的に理想的な偉人と生まれ変わる可能性がある。

我々偉人アンドロイドの制作を手がける者の使命は、偉人の社会的人格をより尊いものにし、偉人を敬愛する人々だけでなく、一般の人々にもポジティブな影響を与えるようにすることではないかと考える。

偉人アンドロイド基本原則

以上の議論を踏まえて、私の考えるアンドロイドの基本原則とは、次のようなものである。

第一条 社会的人格を表現するものでなければならない。

第二条 社会で許容され難い個人的人格を再現してはいけない。

第三条 人々のポジティブな想像を引き出し、人々に対話できる偉人として、ポジティブな影響を与えるものでなければならない。

偉人とは社会の中で、その偉大なイメージが共有されている人のことである。それ故、言葉を発し体を動かせる人間らしいアンドロイドとして、その偉大さを人々に伝えるものでなければならない。

遠い昔に亡くなった偉人には、現代社会の中で共有されている偉大なイメージがある。そのイメージをまとった人間らしいアンドロイドが、偉人のアンドロイドであるべきだろう。偉人のイメージをまとめて、銅像以上に人々に影響を与えるアンドロイドを造る。これが偉人のアンドロイドを作ることの意義である。

無論、畏敬の念を感じるだけのアンドロイドでは、人々の心を十分につかむことはできないだろう。時折見せる個人的な側面に、豊かな人間性が表れることは常である。しかしながら、気をつけなければならないのは、その個人的な側面を見せすぎないということだ。

残念ながら今のアンドロイド技術は、人間をそのままに再現できるわけではない。対話や動作の機能は非常に限られている。それ故、人間のように人々と多様な関わりを持つことができない。非常に限定された関わり方しかできないのである。

そのような限定された対話や動作の機能を基に、多くの人を魅了しながら、多くの人に影響を与え、その偉人の威厳をさらに広げるアンドロイドを開発する必要がある。

2018 年度研究教育活動の概要

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 山口 直孝



2018年度は、前年度を受け、漱石アンドロイドの本格的な運用を続け、さまざまな新しい試みに挑戦した。具体的には、①漱石アンドロイドを用いた、また、対象としたシンポジウムの開催、②二松学舎大学大学院文学研究科と大阪大学大学院基礎工学研究科との共同研究における最初の実験実施、③夏目漱石の生涯と文学とを学ぶ授業での利用、④学会やフォーラムの中での活動、⑤本格的なテレビ出演に関する協力、⑥学生のサークル活動の支援などが挙げられる。以下、項目別に2018年度の活動を概観する。

①、シンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？ 偉人アンドロイド基本原則を考える」の開催

2018年8月26日（日）に上記のシンポジウムを開催した。プログラムは、三部構成。「Opening Act」として平田オリザ作・演出の漱石アンドロイド演劇『手紙』を上演した後、「Symposium」第1部・第2部を行った。

『手紙』は、正岡子規と夏目漱石との交友を題材に、史実を踏まえながら、漱石が小説の書き手として自己を意識していく過程を書簡のやり取りで描く。出演は、漱石アンドロイド（夏目漱石）と井上みなみ（正岡子規）、上演時間約30分の一幕物である。平田氏には、その時点ですでにアンドロイド演劇の実績があったが、実在した人物のアンドロイドを用いるのは初めてであった。事実と虚構との境界線が曖昧になる工夫を何重にも重ねた舞台（人間－アンドロイド、生－死、男性－女性、日本－イギリスなど、いくつもの対立項が同時に現われる）は、アンドロイド演劇の、また漱石アンドロイドの役者としての可能性を実感させるものであった。

「Symposium」第1部、「漱石を甦らせるとはということか」では、石黒浩「開催にあたり」、山口直孝「漱石アンドロイドプロジェクトの目指すもの」、福井健策「アンドロイドに権利はあるのか？ それは誰が行行使するのか？——著作権、肖像権、ロボット法」、島田泰子「漱石アンドロイドの発話行為、どこまでホンモノに近づけるか」という四つの報告があった。人型ロボットの中でも漱石アンドロイドは著名な人物を踏まえているだけに、さまざまな問題の発生が予想される。例えば、一般的な、あるいは個別の夏目漱石像とアンドロイドの印象とが異なることはありうることであり、実際にもしばしば見受けられる。漱石アンドロイドの人格は、「漱石」と同じなのか、別なのか。また、誰が人物像を作る権利をもち、誰が拒絶できるのか。さらに、どこまで自由な行動が許され、何が控えられるべきなのか。アンドロイドの研究の歴史や漱石アンドロイドプロジェクトの歩みを振り返りながら問題点が提示され、法律の観点から課題が整理された。同時に、音声プログラム作成の経験を踏まえ、漱石アンドロイドが聞き手に安心感を与えるために、どのような話し方およびしぐさの要素が求められるのかについて見通しが述べられた。

第2部、「偉人アンドロイド基本原則」は、平田オリザ「漱石アンドロイド演劇について」、石黒浩・福井健策・谷島貫太「基本原則案の提起」、石黒浩・福井健策・平田オリザ・夏目房之介・谷島貫太「〈討議〉偉人アンドロイド基本原則はどうあるべきか」の順に進んだ。平田オリザ氏のアーティスト・トークでは、漱石アンドロイド演劇制作を通じて感じたことと著作権に関して常日頃考えていることが語られた。著作権のある程度の保護を当然としながら、行き過ぎた権利主張がもたらす弊害をも指摘した平田氏の意見は、『手紙』における二人の文学者の発言にも反映されている。「基本原則案の提起」では、個人・遺族の名誉やプライバシーを守る限り、誰でも、誰かのアンドロイドを作ることができること、社会的人格権を尊重する限り、アンドロイドに何をさせてもよいこと、公にはアンドロイドは人として扱われなければならないことなどを原則とすることが各パネリストから提案された。続く討議では「偉人」ゆえに広く共有されている人物像を損なわないよう配慮しつつ、創造の自由が保証されなければならないという認識を共有しながら、さまざまな意見が出

された。「人格」を有するかのように見えるアンドロイドという新たな存在をめぐり、社会制度や法が、また思想が問い直されていることを実感させる議論は、刺激的であり、かつ面白いものであった。

演劇とシンポジウムとを組み合わせたプログラムであったこと、登壇者に魅力的な顔ぶれが揃ったこともあって、当日は多くの参加者で賑わった。アンドロイドをめぐる権利という、SF小説のような最先端の問題を取り上げたゆえ、マスコミの注目も高く、シンポジウムの模様は、翌日のNHKの『おはよう日本』の特集コーナーで報じられた。

シンポジウムの成果は、谷島貫太が中心となり、書籍にまとめられた（漱石アンドロイド共同研究プロジェクト編『アンドロイド基本原則——誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』（日刊工業新聞社、2019年1月）。同書には、『手紙』の脚本も併載されている。掲げられている基本原則の四つ目、「アンドロイド自身には肖像権も著作権も著作隣接権も発生しない」には、「ただしアンドロイドが人格を獲得したという社会的な合意が得られた際には本原則は再検討される」という附記がある。共同研究がすぐれて現在進行形のものであることを、但し書きは端的に示している。（本報告書14～17ページ参照）

②、心理受容実験の実施

2018年12月1日（土）・2日（日）、心理受容実験を二松学舎大学九段キャンパスにて行った。二松学舎大学の学生や附属高等学校生を対象として、語りや朗読の印象をアンケートによって測定する調査は複数回実施してきたが、被験者を単独にするのは今回が初めてである。統制条件を厳密にしたことにおいても、本実験は画期的であったと言ってよい。

共同実験の計画は、2017年度より進められていた。漱石アンドロイドの語り方によって親密性がどのように変化しているか、また、漱石アンドロイドの自己語りがどのような影響を与えるかなどをモチーフとした実験などが検討されている。今回の実験は、それらの計画の討議を踏まえて提案されたものである。

漱石アンドロイドに接した人からの感想からは、それぞれが確たる漱石についてのイメージを心に持っているという傾向が顕著にうかがえた。体験者は、期待する漱石像を漱石アンドロイドに見出して感動しているのではないか、という仮説は魅力的であり、検証するにふさわしい。畏敬の念は、相手の発言が少なければ少ないほど、言葉を重く受け止め、威厳を感じるという、転倒した事態すら引き起こす場合がある。漱石アンドロイドとの対面状況において、被験者は何を感じているのか、実際には誰と向き合っているのか、心理の推移を可視化したいという動機から本実験は企画された。中心となったのは、高橋英之（大阪大学）である。

実験では、漱石に関する趣味や嗜好に関する話題について、被験者への質問を交えながら聞いてもらった。漱石アンドロイドが話す場合と陪席している助手役が話す場合とを用意し、比較できるようにした。発話量の多寡によって、印象がどのように異なるかを見定めるのが実験の狙いである。実験の前後にアンケートに回答してもらい、予備知識や期待感と対面後の感想との相関を探る材料とした。被験者は、インターネットで公募し、37名の協力を得た。

実験の結果、事前の予想通り、漱石に対する興味・知識と漱石アンドロイドに感じたリアリティとの間に相応の対応が見られた。また、人工知能に対する畏怖と漱石アンドロイドに感じたリアリティとの間にも強い相関が現われた。漱石に会うことができた感激とテクノロジーの進歩に触れた満足とが重なっているところに漱石アンドロイド固有の受容相があり、二つをどのように識別していくかが今後の課題となる。

本実験は、研究倫理審査の手続き、実験の準備や進行、事後の処理などを具体的に知りえたことでも成果があった。二松学舎大学文学部では蓄積の乏しかった心理受容実験の経験は、今後の道しるべとなるものであろう。なお、本実験を踏まえた論文は、すでに学会誌の査読審査を受け、掲載が決定している（高橋英之、伊豆原潤星、改田明子、山口直孝、境くりま、小山虎、小川浩平、石黒浩「文豪アンドロイドに感じるリアリティと事前知識・信念の関係性の検討」、日本知能情報ファジィ学会『言語と情報』、採択決定日2019年3月1日）。（本報告書18～19ページ参照）

③、「日本文学概論B」における特別授業実践

二松学舎大学文学部国文学科には、「日本文学講読入門①（夏目漱石）」という、一年生を対象とした必修科目がある。夏目漱石の生涯と文学とについて学び、教養の基礎を形成するのが目的であり、2018年度は瀧田浩・宮沢剛・山口直孝の三人が担当した。本授業の導入として、漱石アンドロイドを用いた特別授業を企画した。使用教室の関係で、受講者

を同じくする「日本文学概論B」の時間を利用し、「日本文学講読入門①」との接続を図った。実施したのは、2018年9月14日（金）および9月19日（水）である。漱石アンドロイドを登場させた授業は、2017年度にも「文学入門」（改田明子）や「基礎ゼミナール」（改田明子、谷島貴太）ですでに試みているが、今回は、内容との関わりがより深い講義における利用である点に、新しさがあった。

担当者に伊豆原潤星研究助手を加えたメンバーで事前に打ち合わせを行い、内容を検討した。運営については、漱石アンドロイドサークルに協力を仰ぎ、登壇者にも加わってもらった。また、授業アンケートを準備し、質問項目を選定した。

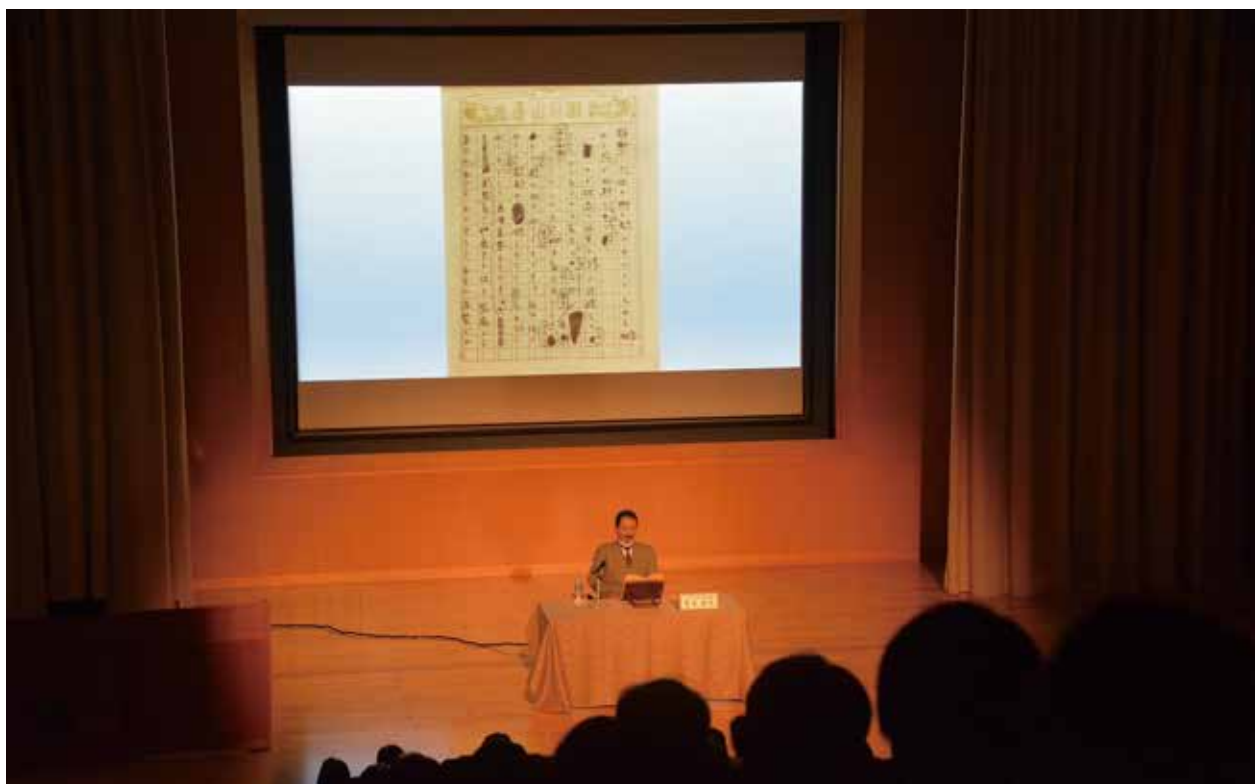
授業の流れは、以下の通りである。①、漱石アンドロイドの制作過程およびこれまでの活動の紹介。NHKニュースの映像を参考資料として用いた、②、漱石アンドロイドによる自己紹介と『こころ』の朗読、③、漱石アンドロイドと担当教員との会話（もしくは、漱石アンドロイドサークルメンバーによる『こころ』解説）、④、漱石アンドロイドサークルの紹介、⑤、アンケート回答。

受講生の反応はおおむね好評であり、『こころ』の朗読に熱心に耳を傾ける様子が見られた。

講義の狙いとしては、漱石アンドロイドの成り立ち、二松学舎との関わりを含めた夏目漱石の生涯、『こころ』の書かれた時代と作品の重層的な構造、漱石アンドロイドサークルの活動などについて理解を深めてもらうことがあった。アンケートの回答からは、所期の目的がある程度達成できたことが感じられた。一方で高校生よりも漱石アンドロイドの印象は多様であり、否定的な意見も聞かれた。個々の感じ方を否定することなく、漱石アンドロイドと夏目漱石とについての理解を相互に深めていく授業展開を工夫することが今後の課題となる。なお、本授業については、教育実践報告として論文化する予定である。（本報告書20～23ページ）

④、学会、教育会議における登壇

2018年6月2日（土）に開催された全国大学国語国文学会の特集「AI時代に大学、国語・国文学は何をすべきか、何ができるのか」（コーディネーターとして塩沢一平、パネリストとして増田裕美子が参加）、10月13日（土）に開催された朝日教育会議「グローバル時代を生きるための「国語力」」（講演者として山口直孝が参加）に漱石アンドロイドが登壇し、前者では『夢十夜』「第一夜」、後者では『こころ』の朗読を披露した。いずれの場においても、漱石アンドロイドは参



朝日教育会議において『こころ』を朗読する漱石アンドロイド

会者の目に圧倒的な存在として映り、新しい文学体験の形があることを実感させたようである。

全国大学国語国文学会におけるテーマは、AIの進歩に伴い、人間独自の営みと位置づけられてきた文学がどのように変化し、研究者がいかに向き合うか、ということであった。漱石アンドロイドは、現時点における工学技術と文学との融合を象徴するものとして登場した。朝日教育会議では、文字言語中心で行われている文学教育の現在のあり方を見直し、集団での作品享受を可能にする媒体として、漱石アンドロイドが紹介された。どちらにおいても学生のアクティブ・ラーニングの例が報告され、漱石アンドロイドが新しい文学体験を創出できる存在であることが強調された。二つの学術的な催し自体も、文学体験の場であったということができよう。(本報告書24～27ページ参照)

⑤、BSプレミアム「天国からのお客さま」出演

NHKBSプレミアムで2018年10月20日(土)20時より、スーパープレミアム「天国からのお客さま」が放映された。本番組は、夏目漱石・勝新太郎・立川談志三人のアンドロイドの活動を追ったドキュメンタリーである。漱石アンドロイドは、オープニングに登場し、また『文学論』講義のパートにおける講師を務めた。

講義は「文学論講義再び」と題し、小説家のいとうせいこう氏と奥泉光氏とを聞き手として神奈川公会堂で行われた。内容は、『文学論』に基づき、現代的な要素を加味したもので、『文学論(F+f)+f』(幻戯書房)を著した批評家の山本貴光氏が作成した。当日漱石役として、いとう氏・奥泉氏とのやり取りを担当したのも山本氏である(番組放送時は、夏目房之介氏の声に吹き替えられた)。

番組制作に際しては監修者として助言を行い、また漱石アンドロイドのパブリック・イメージが損なわれないよう配慮を求めた。全体として、漱石アンドロイドは作家および英文学者として、畏敬すべき存在として描かれていたように思われる。受容論の観点から小説の評価の変遷を説いた「文学論講義再び」の内容もすぐれており、教材として利用したいと感じさせるものであった。

報道以外での本格的な番組出演は今回が初めてである。自律的に会話をしているように描かれていたところに実際の隔たりがあったが、動画において漱石アンドロイドが映える存在であることを再認識させられた。映像媒体の活用が今後とも探られるべきであろう。

⑥、漱石アンドロイドサークルの活動

2017年度夏より、学生有志による漱石アンドロイドサークルを組織し、活動を展開している。サークルは、漱石アンドロイドの教育における活用の一つの試みとしての意義を持ち、また、共同研究の一翼を担うものである。山口直孝が顧問を務め、阿部和正研究助手、伊豆原潤星研究助手が学生の指導に当たっている。前年度に整えられた基盤の上で、2018年度は活発な活動を行った。

年度初めの4月・5月に説明会を開いて新規のメンバーを募集し、十数名の参加者を確保した。定期的な活動日を設けて、漱石アンドロイドの取り扱いや設営についてガイダンスを実施し、学生のみで準備や設定ができるように指導した。操作についても、同様である。TTS(Text to Speech)を用いた音声プログラム作成の習熟にも取り組んだ。

活動の成果を披露する機会として、オープンキャンパス(2018年8月19日、9月23日)、学園祭及びホームカミングデー(2018年11月3日)があった。オープンキャンパスでは、漱石アンドロイドが時候の挨拶、自己紹介の後に『こころ』の朗読を行った。学園祭及びホームカミングデーでは、「漱石アンドロイドと聞く江戸落語」と題する催しにおいて和服姿で登場し、落語に関するエピソードを披露した。進行や演出は、基本的にサークルのメンバーが手がけ、よく工夫された舞台は、参加者に好評であった。オープンキャンパスでは、サークルの活動を紹介するパネル展示も同時に行った。

学生たちの発想は斬新であり、実行力にも富んでいる。漱石アンドロイドのLINEスタンプや朗読動画の制作も進めており、今後も漱石アンドロイドの活動領域を拡げる展開が期待される。(本報告書28～29、34～37ページ参照)

ほかにも実験準備や音声プログラム作成を行った。研究のための分科会は、定期的に開催している。2018年度は、研究・教育でのいずれにおいても前年度を上回る活動実績を残すことができたと思われる。本年度の成果を踏まえて、次年度はさらなる飛躍を目指したい。

シンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？」および書籍『アンドロイド基本原則』

二松学舎大学文学部
専任講師 谷島 貫太



漱石アンドロイドのプロジェクトは、工学の知と人文学の知が交差するところで生み出された。前者を担保しているのが、大阪大学大学院基礎工学研究科の石黒浩研究室だ。オブジェクトとしての漱石アンドロイドの制作やその動作に関わる側面を扱う。後者を担保しているのが二松学舎大学のチームである。漱石の人物像の設計（歴史）や発話の運用（ことば）、またその心理的效果（心理）など、いわば表現物としての漱石アンドロイドに関わる側面を扱う。アンドロイドそのものが工学の領分に属するものであったとしても、それが人間の前に現われ、さまざまな意味を生み出していく場面に入っていくと、人文学的な専門性が必要になってくるのだ。ただし漱石アンドロイドのプロジェクトに対して人文学的な知が貢献できるという点では、もう一つ重要な観点があると考えられる。それが哲学である。哲学と言っても、ここで念頭に置かれているのは個々さまざまな具体的な哲学言説のことではなくて、事象に対する哲学的な態度のことだ。もう少し言うと、目の前で進行している出来事に対していったん立ち止まり、「そもそも」を考えてみるという態度である。

2018年8月26日、二松学舎大学大学院文学研究科と大阪大学大学院基礎工学研究科の共催で「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？——偉人アンドロイド基本原則を考える」と題したシンポジウムが開催された。ここでの「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？」という問いを生み出しているのは、「そもそもわたしたちは漱石を甦らせる権利をもつのか？」という原理的な問いだ。すでに漱石アンドロイドを作ってしまった後にそんなことを問いはじめるのはおかしいと思うかもしれないが、哲学者のヘーゲルが「ミネルヴァのふくろうは迫り来る黄昏に飛び立つ」と述べているように、哲学というのはだいたいにおいて事が終わった後に登場するものだ。とすればプロジェクトの佳境はまだこれからだということを考えると、むしろこの哲学的な問いの登場は早すぎるくらいである。本稿では、1. シンポジウムについて、2. シンポジウムの内容をベースとした書籍について、記述していく。

1. シンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？——偉人アンドロイド基本原則を考える」

2018年8月26日@中洲記念講堂

漱石アンドロイドプロジェクトにおいて、アンドロイドの制作面を全面的にサポートしているのは大阪大学の石黒浩研究室である。この石黒研究室では、これまで架空の人物から有名人まで多様なアンドロイドを制作してきたが、制作時点ですでに故人となっている人物をモデルとするのは漱石アンドロイドがはじめてだった。その際に持ち上がったのは、だれに許可をとればいいのか、という問題であった。モデルが生きていれば、本人に確認をとればよい。しかしその本人がいなくなると、許可と権利の問題はとたんに複雑になる。幸い夏目漱石の場合には夏目房之介氏をはじめとするご遺族の了解をとりつけることができ、制作をすすめることができた。ただしこれは幸運なケースであり、そうでないケースがあってもまったく不思議ではない。

故人となった偉人と呼ばれる人物のアンドロイドを制作する際に、もし遺族がいる場合にはその遺族の承諾を得る必要がある、と考えるのは自然な発想だろう。ただ改めてよく考えてみると、偉人のアンドロイドを制作する（またそれを許可する）権利は遺族が有している、ということはけっして自明な前提ではない。著作物であれば、その権利の範囲は著作権法によって明確に定められており、著作家が故人となった場合には遺族が権利を有することになる。しかし、アンドロイドを作る権利が誰にあるのか、ということを決めた法律などどこにもない。では、なにを判断の拠りどころとすればいいのか。

法律の問題を超えてより一般的な次元で考えるならば、ここでわたしたちが直面しているのは、社会で広く共有された



シンポジウムでの討議の様子

グアクト上演の際には演劇上演についての場内アナウンス以外にはなにも説明せず、いきなり演劇が始まる、という構成にした。約30分の上演ののち、短い転換を挟んでシンポジウム本編がはじまる、という流れである。なお転換の際にはステージ上に衝立を置いて目隠しをし、移動する漱石アンドロイドが観客の目に触れないように配慮した。シンポジウム第一部では問題提起のための二つの発表が行なわれた。一つは福井健策弁護士による「アンドロイドに権利はあるのか？それは誰が行使するのか？——著作権、肖像権、ロボット法——」。もう一つは本学の島田泰子教授による「漱石アンドロイドの発話行為、どこまでホンモノに近づけるか」。それぞれ法的権利、日本語の発話行為という点から漱石アンドロイドについて考察した発表である。その詳細な内容については、書籍『アンドロイド基本原則』に論文として再収録しているのでそちらを参照されたい。休憩を挟んでの第二部では、偉人アンドロイドをめぐる基本原則を構想することを目的として、大阪大学の石黒浩教授、弁護士の福井健策氏、そして本学の谷島貴太専任講師から基本原則案の提案が行なわれた。そののち、劇作家の平田オリザ氏、漱石アンドロイドに声を提供している漱石の孫である夏目房之介氏、そして漱石アンドロイドにも加わってもらい、偉人アンドロイドをめぐる基本原則はどうあるべきかが討議された。前記の3つの基本原則案の提案、およびつづけて行なわれた討議の内容は、書籍『アンドロイド基本原則』にて、四つの偉人アンドロイド基本原則案としてとりまとめられている。

抽選で多くの落選者を出した満員の会場の熱気は、オープニングアクトの漱石アンドロイド演劇の上演からシンポジウム全体をとおして冷めることなく、長時間のシンポジウムにもかかわらずほとんどの観客に最後まで参加いただけた。SNS上でも活発なリアクションがあり、後半の討議ではtwitter上でのつぶやきに応答していく場面もあった。シンポジウム翌日にはNHKのニュース「おはよう日本」でも複数回とりあげられ、また地方のラジオ局や数多くのインターネット上のニュース媒体がシンポジウムの様子を報じていた。シンポジウム本番およびその後の反響を経て、「そもそもわたしたちは偉人をアンドロイドとして甦らせる権利を持っているのか？」という原理的な問いを、これからの社会で問われるべき新しいアジェンダとして提起することができたという大きな手応えをつかむことができた。

2. 書籍『アンドロイド基本原則——誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』

シンポジウムの準備段階から、より広く社会に研究成果をアピールし還元していくため、その成果を書籍として刊行することを計画していた。2019年1月に、シンポジウムでの発表および討議の内容を踏まえ、またさらにアンドロイドや漱石アンドロイドについての基本的な情報や前提を紹介する内容も加えた上で、日刊工業新聞社より書籍『アンドロイド基本原則——誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』が刊行された。同書の概要を説明する。第1章「アンドロイドとは何か」では、アンドロイドという存在一般についての概略的な説明を行なった。第2章「我々はアンドロイドを作った」では、漱石アンドロイドプロジェクトの全体像を提示した。第3章「アンドロイドをめぐるいくつかの論点」では、シンポジウムでの発表に加え、これまで行なわれてきた実証実験なども含め、「心理」「法」「社会」「ことば」「ビジネス」といった多様な観点からのアンドロイド／漱石アンドロイドをめぐる議論を提示した。第4章「アンドロイド基本原則はどうあるべきか」では、シンポジウム内での発表や討議を全面的に再構成し、四つの「偉人アンドロイド基本原則案」としてとりまとめた。合わせて、問いの可能性を大きく開いておくため、夏



『アンドロイド基本原則』書影

目房之介氏による疑義も収録した。第5章「人がアンドロイドとして甦る未来」では全体のまとめを行なった。また巻末付録として、平田オリザ氏が書き下ろした漱石アンドロイド演劇「手紙」の台本を、本学の瀧田浩教授の解題と共に収録した。

同書籍の一つの核となるのは、シンポジウムの内容を基にして再構成された四つの基本原則案である。わたしたちは、漱石アンドロイドをこれからのアンドロイド時代を一足先に先取りしている存在だと考えている。さまざまな歴史的偉人がアンドロイドとして甦ってくるという事態がこれから多く起こってくるとすれば、わたしたちの社会は、それらの偉人アンドロイドたちとどのように付き合っていくべきなのかを、どこかの時点で真剣に考えなければならない。漱石アンドロイドプロジェクトは、来たるべき未来に対するそうした準備の機会を提供するものでもある。『アンドロイド基本原則』にまとめられた四つの基本原則案は、その第一歩であると言える。

まとめられた四つの原則案は以下である。

○偉人アンドロイド基本原則①：アンドロイド制作の自由原則

「故人・遺族の名誉やプライバシーを尊重する限り誰のアンドロイドを制作してもよい」

○偉人アンドロイド基本原則②：アンドロイド運用の自由原則

「偉人本人の社会的人格を尊重する限りアンドロイドに何をさせてもよい」

付則：ただしアンドロイドによる行為や発言がフィクションであることを明示しなければならない

○偉人アンドロイド基本原則③：アンドロイドの尊厳原則

「偉人アンドロイドは公的にはあくまでも人として扱われなければならない」

○偉人アンドロイド基本原則④：アンドロイドの無権利原則

「アンドロイド自身には肖像権も著作権も著作隣接権も発生しない」

上記基本原則の詳細については書籍『アンドロイド基本原則』を参照してほしいが、一言付言しておく、上記原則はより広い社会的合意を獲得しうるものとするために、いくつかの点で比較的保守的な態度をとっている。たとえば偉人のネガティブな側面やプライベートな側面を偉人アンドロイドを通して表現することを推奨しない原則案になっている。しかし他方、シンポジウム内で平田オリザ氏から、芸術家としてはできるだけ自由に何でもやらせて欲しいという要望があがっていたように、このような保守的な姿勢は偉人アンドロイドが有する可能性をいくぶんか殺してしまう可能性も有している。この点については、シンポジウム終了後に夏目房之介氏がブログ上で発表した文書を若干の修正のうえ同書に再収録することで、原則案をめぐる議論を開かれたものとするようにした。このことからわかるように、同書で提起した原則案は、まだ萌芽の段階に留まるものでしかない。わたしたちはさまざまな実践や挑戦を通して、この原則案を肉付けし、また必要があれば修正を施していくことで、アンドロイドおよび偉人アンドロイドがいつそ社会のなかで存在感を増していくであろう未来のための礎としていきたいと考えている。

認知科学的観点からみた 21 世紀の 漱石アンドロイド

大阪大学大学院基礎工学研究科

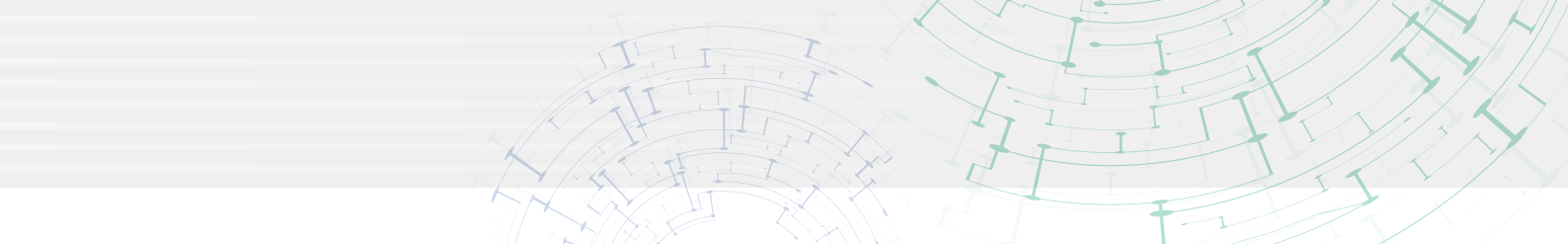
特任講師 高橋 英之



21世紀を生きる現代人が夏目漱石という過去の偉大な文豪とアンドロイドを通じて“再会”した際に我々の心にどのような作用が生じるのか、このような前代未聞な問いを文理問わない多様な観点から学際的に研究することは大変興味深い試みだと思われます。2018年度は、二松学舎大学と大阪大学の度重なる研究議論を通じて実施した最初の心理実験の結果を、本プロジェクトにおける最初の学術論文として知能情報ファジー学会の論文誌「知能と情報」に受理していただくことができました（出版自体は2019年の9月の予定）。この研究の詳細については、やがて出版される論文、もしくは日本工業新聞社から1月に出版された漱石アンドロイド共同研究プロジェクト編『アンドロイド基本原則』をご参照いただきたいと思ひ、今回の文章ではこの実験で得られた知見を、もう少し一般化した議論に拡張して考えてみたいと思います。

この研究の狙いは、「漱石」や「アンドロイド」、「人工知能」に対して抱いている参加者の先入観が、どのように漱石アンドロイドと出会うという体験に対する印象に影響を与えるのか、という基礎的な問いについて調べるものでした。漱石アンドロイドを如何に精巧に創り上げたとしても、それと接する人間の受け入れる心的姿勢が伴っていなければ、アンドロイドの価値が十分に発揮されるとは思えません。例えば、夏目漱石について全く知らない遠い異国の人が漱石アンドロイドと出会ったとしても、「髭を生やしたアジア人の中年男性のアンドロイド」以上の感想を抱かない可能性があります。つまり偉人のアンドロイドを創る、ということは、そのアンドロイドを如何に精巧に創り上げるのか、という点だけでは不十分であり、そのアンドロイドに接する人間の心的姿勢や事前知識についても十分に考慮した設計が必要のように思います。しかし心的姿勢や知識が十分に備わっている漱石の特定のコアなファンだけに絞ってアンドロイドの姿や振る舞いのデザインを緻密にしたら、漱石アンドロイドが社会に及ぼす波及効果はとても小さなものになるでしょう。一方で、多様な背景や価値観を持った人間が存在する現代社会において、すべての人に忖度したアンドロイドを創ろうとすると、個性が無い「のっぺらぼう」のような存在が生まれてしまう恐れがあります。

このような話をもう少し拡張して考えてみると、アンドロイドを超えた人間のコミュニケーション論にも繋がるように思います。我々は様々な社会的アイデンティティを身に纏って暮らしています。このような社会的アイデンティティというのは、社会の中で共有されていることが暗黙の前提になります。例えば社会的ステータスの高いとされる「弁護士」や「医者」、「カリスマyoutuber」という職業であったとしても、これらの職業が存在しない文化の中ではその職業特有のアイデンティティを発揮することができません。すなわち人間のアイデンティティというものは単独で存在するわけではなく、受け手がそ



れを受容できることが存在の前提としています。例えば二人だけの関係であれば、お互いで共有しているアイデンティティを演じることもできるかもしれません。しかし多くの場合、社会的アイデンティティとは一対多の関係で多数の受け手に受容される必要があります。しばしば「個性を大事に」、「自分らしさが必要」などのフレーズが使われますが、多くの場合はこれらの自分独自とされるアイデンティティであっても、結局は現代社会に共有された不特定多数の他人からの受容可能性が前提なものに留まっているのだと言えます。もしこの世界に真の“自分だけの個性”というものがあるとしたら、そのようなアイデンティティは社会の中で未だ共有されてはいないはずなので、それを他者がそのまま受容することは論理的に不可能なのかもしれません。

このように考えていくと、21世紀の現代において万人に受け入れられる漱石アンドロイドを創り出す上で、何らかのムーブメントを通じて社会の中にある程度共有された夏目漱石の社会的アイデンティティのイメージを創り出すことは必須なのかもしれません。しかしこれは社会全体の意識の変容を必要とする方法な為、なかなか容易な道ではありません。今回受理された論文では、このような社会で共有された漱石のアイデンティティを創り上げる困難さを回避する為の代替的な方法として、漱石アンドロイド自体にはあまり発言をさせないで、陪席者がアンドロイドの代わりに多くを語ることで、漱石アンドロイドと接する人間が自らの価値観に適合するように漱石のアイデンティティを自由に想像することが可能になる、という単純なアイデアを提案しました。心理実験による検証の結果として、(それほど強い傾向ではないのですが) 漱石に対する知識を有している被験者ほど、あまり喋らない漱石アンドロイドに対してリアリティを感じる、という結果を得ることができました。

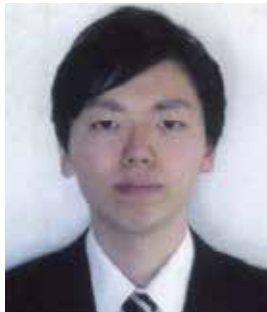
以上の結果は、人間の想像力を引き出しやすい“間”をアンドロイドにもたせることで、社会の中で広く共有されたアイデンティティのイメージ抜きで、多数の人達に漱石のアンドロイドに対してリアリティを感じさせることを可能にする消極的な方法と言えるのかもしれません。一方で、前述のようにこの方法は「のっぺらぼう」を創り出すことに他ならず、漱石アンドロイドが社会の中で大きなインパクトを与えるものにはならない可能性があります。

ではより社会的にインパクトがある漱石を創り出すためには、どのような方法が必要なのでしょう?非常にシンプルな回答ですが、それはアンドロイド製作者が「自分の信じる漱石のアイデンティティ」を徹底的に作りこむこと、と筆者は考えます。先ほどから述べているように、現代の日本においては全員が共有している夏目漱石のアイデンティティというものは存在しないように思います。そもそもある個人に対してみんなが共有した同一のイメージをもっている、という状況はどこか不気味なようにも感じます。従って、どのような漱石を創ればいいのかの答えを社会の中で探しても、ひたすら迷子になるだけでしょう。むしろ「自分が創り出した漱石が社会から受容されなくても、私はそれを信じぬく」という強い態度で、自分が信じる漱石を他人に忖度せずに徹底的に深掘りし、それを堂々と世に問うていく、そういう信念を持つことによって初めて、単なる受容を超えた強い感動を受け手に与えることができるのではないのでしょうか?ある方面への顔色を窺った漱石アンドロイドづくりは、宗派戦争のような違う方面からの反発を生み出す可能性があります。むしろ漱石を愛する個人(もしくは少数チーム)が他人の顔色を窺わずに自らの信念で創り出した漱石のアイデンティティは、受け手の観測点をイデオロギーの外に押しやる可能性を秘めています。そして受け手が既存のイデオロギーの外側から静かに漱石アンドロイドを眺めた際に、初めて漱石アンドロイドの真価が試されるのかもしれません。

最後に、漱石先生の講演「私の個人主義」の一節を引用して、筆を置きたいと思います。

「私はこの自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。彼ら何者ぞやと気概が出ました。今まで茫然と自失していた私に、ここに立って、この道からこう行かなければならないと指図をしてくれたものは実にこの自己本位の四字なのであります。」

漱石アンドロイドを利用した授業の試み



二松学舎大学大学院文学研究科
助手 伊豆原 潤星



二松学舎大学大学院文学研究科
教授 瀧田 浩



二松学舎大学大学院文学研究科
教授 山口 直孝

日本文学講読入門①（夏目漱石）の特別授業

漱石アンドロイドを用いた講義は、教育活動の柱の一つとなるものである。授業に利用する取り組みは、前年度より始まっていた。2017年度には、文学部国文学科1年生の必修科目である「文学入門」（受講者約350名。文学部の専任教員がそれぞれの専門分野について紹介するリレー式講義。教育心理学専攻の改田明子の担当時間に実施）および「基礎ゼミナール」（受講者約25名。文学部の専任教員が担当し、大学での学びに必要なリテラシーを学ぶ演習。改田明子・谷島貫太のクラスで実施）において漱石アンドロイドを使った。それぞれにおいて漱石の語りを学生に聞いてもらい、また、簡単な心理実験にも協力してもらった。人型アンドロイドというなじみのない存在に触れる機会であったことを含めて、受講生にはよい体験であったと思われる。

本年度は、講義内容とより関わりのある文脈で漱石アンドロイドを活用することに挑んだ。国文学科には一年生の必修科目として「日本文学講読入門①（夏目漱石）」がある。本講義では、学生が研究の基礎を会得するために、近代文学の代表的な書き手であり、二松学舎ゆかりの人物である夏目漱石の生涯と文学とについて、半年をかけて学んでいく。担当者は、瀧田浩・宮沢剛・山口直孝の三人、受講者はそれぞれ約130人である。共通テキストとして『新潮日本文学アルバム 夏目漱石』を定めているが、取り上げる作品や進め方は、担当者の裁量に委ねられている。「歴史的に考えることで一般的にイメージされる既成の漱石像から解放され」ること（瀧田浩）、「漱石の多面的な魅力を伝える」こと（宮沢剛）、「作家の生きた時代の特長性を伝えること」（山口直孝。以上「授業概要」より）のように、力点の置き所は異なりつつ、既成の漱石像の見直しを促がすという目標を定めていることにおいては共通する。

漱石アンドロイドは、夏目漱石を模した存在である。夏目漱石をテーマとする授業に登場させるのは、自然な選択であろう。一方で、遠い過去の人物を三次元存在として提示し、また、語りや動作によって受講生のイメージを揺さぶることは、未知のできごととして、予想できない部分を持っている。相当の重なりを持つだけに、漱石アンドロイドによって漱石を説明することは、興味深かつ難しい営みと言えよう。

担当者三人の間でまず授業実施について合意し、準備を始めた。設営や撤収の作業には人手が必要であり、漱石アンドロイドの操演や舞台転換も教員だけでは手に余る。漱



担当教員三人による討議

石アンドロイドサークルに協力を依頼し、伊豆原潤星研究助手には打ち合わせ段階から加わってもらった。日本文学講読入門①（夏目漱石）の教室は、約200人収容の階段教室であるが、教壇が固定されており、漱石アンドロイドは登壇できない。代わりに、受講者が重なる「日本文学概論B」（日本文学の特質について学ぶ必修講義。約400人収容の中洲記念講堂を使用）において特別授業を実施する措置を取った。実施日は、2018年9月14日（金）3時限・9月19日（水）3時限である。

『こころ』朗読を中心とした授業内容と工夫

授業内容についても、事前に何度か相談の時を持った。漱石アンドロイドによる作品朗読と解説とが核になるのは当然にしても、受講者に積極的に耳を傾けるような流れを全体に作りたい。また、聞き終わった後も、パフォーマンスを振り返らせる材料を与えると同時に印象をきちんと記録に留めるようにしたい。さらに、受講生は入学式で一度漱石アンドロイドに接している（祝辞を述べた）が、オープンキャンパスなどで対面している者もあり、親しんでいる度合いが一樣でないことにも留意しなければならなかった。

協議の結果、まとまった進行人案は、以下の通りである。

- ①、授業の趣旨説明（5分）
- ②、制作過程紹介（メイキング映像の上映および説明。15分）
- ③、漱石アンドロイドによる挨拶・自己紹介（6分）
- ④、漱石アンドロイドによる『こころ』朗読および解説（10分）
- ⑤、担当教員三人による討議（15分）
- ⑥、アンケート実施
- ⑦、漱石アンドロイドサークルの紹介（10分）
- ⑧、記念撮影、アンケート回収

①では、夏目漱石について、また漱石アンドロイドをめぐる大学や学生の取り組みについて、理解を深める目的で特別授業が実施されること、アンケートが人とアンドロイドとの関係性を探る上で貴重なデータとなることなどを説明する。

②は、学生が漱石アンドロイドの成り立ちを知る機会がないことを考慮してのもの。NHKニュースの映像も紹介し、本事業が社会的に注目されていることも伝えることを目指す。

③・④は、特別授業の中心となる部分である。漱石アンドロイドは暗転中に登場させ、動けない不自然さを隠すと同時に劇的な効果も狙った。挨拶では時候に触れ、「中秋の名月」と会場となった「中洲記念講堂」とを関連づける発言も盛り込んだ。しゃれを入れたのは、ユーモアを好んだ漱石の一面を表わしたかったからである。自己紹介は、通常版より圧縮した。朗読では、『こころ』「下 先生と遺書」の四十一を取り上げた。選定および音声プログラムの作成は、漱石アンドロイドサークルが手がけた。『こころ』は高等学校の国語教科書の定番教材であり、当該箇所は大多数の人にとってなじみ深い。「先生」は、同じ女性に好意を持つ友人に対して、自分の感情を隠して断念させようと立ち廻る。若き時代の背信行為を「先生」は回想しながら、再現的に若い「私」に語ろうとする。周知の箇所をあえて取り上げたのは、「先生」の語りに複数の声が重なっていることを朗読によって指し示したいという理由からであった。音声の作成に際しては、感情を抑制した調子で、聞き取りやすい速度となることを心がけた。

⑤では、漱石アンドロイドに対する現時点での教員の理解を率直に伝えることに留意した。担当教員においても、漱石アンドロイドはとまどいを与えられる対象であり、手探りの部分を持つことにおいて、かえって文学研究と似通うと言えよう。なお、9月19日実施分については、担当教員が集うことができなかったため、漱石アンドロイドサークルの大川香苗（国文学科3年）に解説を担当してもらった。大川は、『こころ』の語りの構造を取り上げ、また、高等遊民や乃木將軍の話題に即して百年前の歴史的な文脈が作品理解に必要なことを平易な言葉で伝えた。

⑥のアンケートは、A4用紙5枚に及ぶもの。まず、「夏目漱石について知っている伝記的事実やエピソードがあれば書いてください」や「夏目漱石の作品をどれくらい読んだことがありますか」など、漱石に関する知識や読書体験を詳しく問うた。受けた印象についても、例えば「漱石アンドロイドはとても人間らしかった」という項目に対して、「まったくそう思わない」・「あまりそう思わない」・「どちらかというそう思わない」・「どちらとも言えない」・「どちらかと言うそう思

う・「わりにそう思う」・「かなりそう思う」と7段階の選択肢を設けて、反応を細かに分類できるようにした。「漱石アンドロイド」はどんなときに最も人間らしく見えましたが、あるいはどんなときに最も人間らしく見えなかったですか。ご自由にお書きください」や「本日の授業や漱石アンドロイドについて、ご意見・ご感想などをご自由にお書きください」といった記述式回答欄を複数作り、受講生が感じたことを漏らさず把握できるように工夫した。

⑦には、サークルの活動内容を具体的に知ってもらいたい、という期待があった。活動歴が浅く認知度が低い状況を改めるため、複数のメンバーに体験談を踏まえて説明してもらった。⑧は、イベント終了時の定番行事を踏襲したもの。参加者が漱石アンドロイドに最も近づくことのできる瞬間である。

朗読における演出には特に留意した。普段でも書見台や飲料水といった小道具は用意しているが、今回は、『こころ』初版本の復刻版を用意した。照明も工夫し、また、スクリーンに『こころ』の直筆原稿の画像を映し、朗読に合わせてスライドを変え、背景とした。

アンケートに寄せられた多様な声

事前準備に時間を費やしたこともあり、特別授業の当日は、おおむね順調に進行した。ただし、9月19日分については、パフォーマンス終了後に漱石アンドロイドが動かなくなり、記念撮影を中止するというアクシデントがあった（原因は、ケーブルの接触不良）。また、プログラムが盛り沢山となり、時間が押し気味であったことは、反省点である。学生の反応は、おおむね良好であり、集中して漱石アンドロイドのパフォーマンスを見つめ、朗読に耳を傾けていた。ただし、高等学校の生徒と比べればおとなしく、醒めた態度の受講生も見受けられた。大学で半年間過ごした受講生たちには、すでに進んだ批評意識が備わっているであろう。

アンケートのうち、「本日の授業や漱石アンドロイドについて、ご意見・ご感想などをご自由にお書きください」に寄せられた回答をいくつか以下に掲げる（句読点を補った以外は原文のまま）。

- ・二松学舎独自の漱石アンドロイドに授業でも関わることができて楽しかった。完成当初よりも今のほうが人間味があるなと感じた。
- ・「夏目漱石」という人物についての興味がとても刺激されと思いました。
- ・話していない時に周りを見渡したりキョロキョロしていた所は、人間らしいと思った。
- ・普段とは違った授業形式で新鮮な感じがした。少しは夏目漱石に詳しくなれたような気がする。
- ・入学式に初めて見た印象と今日見たのとではまた印象が違った。アンドロイドに少し興味がわきました。
- ・漱石アンドロイドについて最初に見た映像では動きが硬い気がしたけれど、アンドロイド実物を見て手の動きが自然で人間みたいだと思った。
- ・読む時に早口で、息継ぎなしで読んでいるように感じられた。それが続いたからか、私は人間ぽいとは思えなかった。
- ・作者自身の朗読を聞けるのは貴重だと思った。
- ・本日は講演していただき、ありがとうございます。夏目漱石先生が学んだ学校がルーツである二松学舎の名に恥じぬよう頑張りたいと思いました。
- ・『こころ』が現代にも通じる物語だと知ることができて良かったです。
- ・はじめてアンドロイドの講演を聴いたときよりも動きや話し方が人間らしくなっていて感動しました。ですが、声が少しもってしまっていてうまく聞き取れなかった所があったのが少し残念でした。
- ・面白かったです。またやってほしいです。
- ・不思議な気持ちになった。
- ・怖いです。夏目漱石自身が望んだことなら多少はいいと思うのですが……。
- ・茶番はいらないと思う。
- ・漱石アンドロイドをどのように活用するのか気になりました。また、どれほどまで人間に近づいていくのかも気になりました。しかし、気味の悪さと恐怖感が目立ち、何故漱石をアンドロイド化させたのかという疑問が浮かびました。

上記以外にも、声が聞き取りにくかったという感想は、複数寄せられた。これは、漱石アンドロイド備え付けのスピーカーが大きな会場用のものではないという、設備の事情に由来する。

先に触れたように、高校生よりも大学生の評価は、いっそうの広がりを持つ。アンケートにはアンドロイドを不自然な人工物として突き放す言葉から夏目漱石本人に会えた感激まで、多様な意見が寄せられた。一般よりも読書に親しみ、漱石についての知識が豊富な二松学舎大学文学部の学生の場合、文学や作家についての考えが感想をいよいよ複雑なものにしているという事情もあろう。アンドロイドと夏目漱石との結びつきに違和感をめぐえない受講生が何人か見られた。

今回の試みでは、夏目漱石や『こころ』について新しい知識を得、好奇心を募らせる受講生を相当数確認することができた。夏目漱石を講ずる上で漱石アンドロイドは有力な参照点となりうる程度証明されたと言える。一方で、漱石アンドロイドがアンドロイドとして受容される側面が大きいことも見逃せない。制作過程を紹介した今回は特に、アンドロイドとしての精巧さに感動する者が多かった。アンドロイドであることと漱石であることとをどう重ね、提示していくか、さらに検証していく必要がある。

特別授業を踏まえて、三人の担当者は、以後の講義においても漱石アンドロイドへの言及を随時行った。漱石の人となり話す際、漱石アンドロイドをめぐる記憶は、やはり大きな手がかりとなる。漱石アンドロイド演劇『手紙』の動画を流したり、BSプレミアム『天国からのお客さま』を紹介したりする担当者もあった。

講義の最終回（2019年1月9日・1月11日）には、特別授業について、改めてアンケートを実施した。「秋semesterの初めに日本文学概論Bで行った漱石アンドロイドの特別授業は、日本文学講読入門①（夏目漱石）を受講する上で参考になりましたか」の問いについては、「とても参考になった」が9%、「参考になった」が35%、「何とも言えない」が49%、「参考にならなかった」が4%、「まったく参考にならなかった」が3%、また「漱石アンドロイドの特別授業は、夏目漱石について関心を深めるきっかけとなりましたか」の問いについては、「よいきっかけとなった」が17%、「ある程度きっかけとなった」が44%、「何とも言えない」が26%、「それほどきっかけとはならなかった」が10%、「きっかけにはまったくならなかった」が2%という結果であった。肯定的意見が否定的反応を大きく上回ったとひとまず言うことができる。しかし、判断を保留する受講生が多かったことは無視できない。漱石であり、アンドロイドである存在に向き合うことの難しさは、常に意識されておく必要があろう。

講義担当者に見えてきたこと——今後の課題

漱石アンドロイドを用いた授業は、担当者にとっても夏目漱石とその文学とを見直すよい機会となった。一例を挙げれば、作品の細部への目配りが促されたことがある。複数の手記で構成される『こころ』の書き手は、自身を「私」と言う。「先生」も若者の「私」も同じ一人称を用いるが、読み方は「わたくし」、「わたし」、いずれか定かではない。漱石の自筆原稿にもルビは振られておらず、決め手はないが、今回は、「わたし」の読みを採用した。「作家自身による朗読」を行うことには、相応の責任が伴う。曖昧にしがちな読み方の問題を意識化させられたのは、予期せぬ収穫であった。

作家と作品とがある文脈ではひと連なりであることを体感できたことも、貴重であった。物故した作家を取り上げる場合、講ずる者は、対象を自己と隔たった、遠い存在として扱いがちである。作品が独立した表現であることは常識であるが、研究者は、しばしば作品を作者から完全に切り離してしまう。漱石アンドロイドの朗読は、作り手から遠ざけられることで見失われる作品の身体性や歴史性を再認識するきっかけともなった。

漱石アンドロイドが語り始めると、時間は非日常的なものに変容する。散文的に進められる普段の講義とは異質な空間がそこでは立ち現れてくる。「日本文学講読入門①（夏目漱石）」の担当者たちにとって、特別授業は、自分たちで企画し実施したものでありながら、壇上でどのようにふるまえばよいのかしばしば困惑させられる試練となった。漱石（アンドロイド）と語り、漱石（アンドロイド）について話すことの二重性を引き受けることは、虚実皮膜のあわいに自らを置く経験に似ている。文学をめぐる授業において文学的なできごとが生起していることを受講生に体感してもらうことも、目標に付け加わることとなった。新しい文学教育の可能性を、漱石アンドロイドという媒体は豊かに秘めている。

なお、2018年度の特別授業については、伊豆原潤星・瀧田浩・山口直孝により、教育実践報告として文章化の予定である。詳細については、そちらを参照していただきたい。

漱石アンドロイドとA I



二松学舎大学大学院文学研究科

教授 塩沢 一平



二松学舎大学大学院文学研究科

教授 増田 裕美子

現在漱石アンドロイドの流暢な朗読は、A Iによるものではない。漱石の音声により近づけるために、漱石の孫にあたる夏目房之介氏が朗読したものが流されている。それ以外は、房之介氏の音声を利用しながら、手作業による打ち込みによる音声となっている。もっとも、人工音声編集ソフトは搭載されている。私達が作成した原稿を漱石アンドロイドがしゃべる場合は、音声を繋いで自然に聞こえるように近づけることを自動的に行う、「A I Talk®」というソフトが搭載されている。しかし、アンドロイド自身が、自発的に答えることはできない。ただA I搭載も計画には上がっており、A Iによる会話も可能性がある。

では、漱石情報を組み込んだA Iが、漱石級の小説を作り上げることができるのだろうか。またA I漱石アンドロイドが「私の個人主義」のような講演をする日が来るのであろうか。

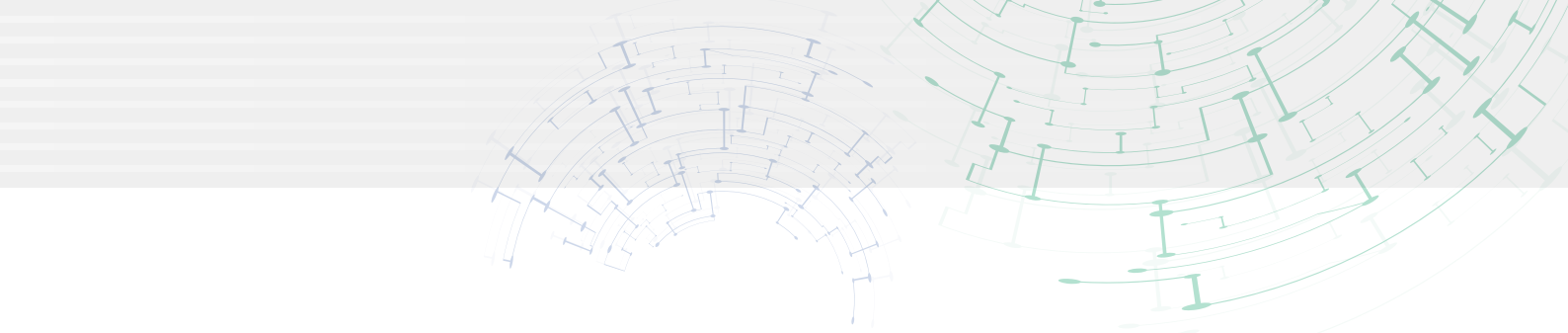
そんな内容も含んだシンポジウムが、二松学舎大学で行われた。全国大学国語国文学会第117回大会のシンポジウム「AI時代に国語・国文学は何をすべきか、大学では何ができるのか」(2018年6月2日開催)である。4人の登壇者の発表とディスカッションを行った。私はコーディネーターと司会を担当した。山川宏(株式会社ドワンゴ 人工知能研究所所長・NPO 法人全脳アーキテクチャ・イニシアティブ代表)は「A Iとは、A Iの現在・未来」、船戸高樹(大学経営戦略研究所代表 元桜美林大学大学院教授)は「A Iと教育、A Iと大学の現在・未来」、石原千秋(早稲田大学教授)は「技術革新と語学・文学」、増田裕美子は「AIとアンドロイド、アンドロイドと語学・文学」と題して発表を行った。上述の問いに対する詳細な答えは、増田報告にゆずることとして、他の登壇者の発表と会場や登壇者相互のディスカッションについて簡略に紹介しよう。

山川氏からは、国文学・国語学研究者の多くが理解していない、A Iとは何かをその研究と3次に渉る人工知能ブームの歴史を含めて詳細に説明がなされた。3次ブームの現在は、人間の脳の働きに学んだニューラルネットワークによるディープラーニング(深層学習)を組み合わせ、様々な事象に対応する汎用人工知能開発の時代であることが詳述された。より人間の脳に近い、全脳アーキテクチャのA Iの開発の方向に進んでいることが示された。

船戸氏からは、A Iの導入により、財務・経理・図書館など7割の職員が代替され、一般教育や専門の基礎科目など3割の教員が代替される可能性を示され、実際に導入されつつある現状が示された。A Iが苦手とする感性(心)の部門の要請が増し、教え方・学び方・学生との接し方に大きな変化が起き、働き方の改革が起こると述べられた。

石原氏からは、A Iが活用するデータが、ビッグデータのように増えれば増えるほど、機械学習によってA Iは進化する。しかしそれによって芸術は、平準化してしまい、面白くない作品となってしまうのではないかと、対極にあるマルセル・デュシャンの『泉』例に示しながら意見が示された。さらにビッグデータを用いずとも、小説では、主人公と物語の関係性はA・Jグレマスによって6つの行為体として抽出できることが知られ、漱石作品もこの関係性で説明できることが示された。

会場からも数多くの質問がなされた。技術的な面から山川氏が現状と可能性を答えることが多く、内容面から文学側が対抗する形の、白熱した議論となった。例えばA I漱石アンドロイドが会話する日の可能性の質問については、簡単な



日常会話はできるだろうが、場に左右されるものはまだまだ苦手であることが示された。小説についても、星新一賞の1次審査を通過する作品までが作られたことが示された。これに対して石原氏からは、発表内容を繰り返す形で不完全な面白みをA Iが奪うことになるつまらなさの指摘がなされ、増田からは、漱石流の比喻や掛詞をA Iが実現することは難しいのではとの指摘もなされた。

(塩沢一平)

2018年6月2日(土)に二松学舎大学で開催された全国大学国語国文学会第117回大会のシンポジウム「AI時代に国語・国文学は何をすべきか、大学では何ができるのか」で、私は「AIとアンドロイド、アンドロイドと語学・文学」と題した発表を行なった。発表前に漱石アンドロイドが舞台上に登場していたので、そのまま私は漱石アンドロイドを用いた演劇実践についてまず話をした。これは昨年度2017年度共同研究報告書にも書いたように、2017年11月5日(日)の学園祭で場所も同じ二松学舎大学中州講堂で行なった私のゼミナールの学生による毎年恒例の『ロミオとジュリエット』上演に漱石アンドロイドが出演したことについての話である。本来ならば劇の一端でも上演する、あるいは漱石アンドロイドにセリフの一部でも語らせたかったところだが、あいにく学生の確保もままならず、劇の再現は難しかったので、私からどのように漱石アンドロイドを劇の中に取り込んで上演したかという話をした。

その際昨年度2017年度共同研究報告書の中の、私の執筆部分から劇に関する文章を抜き出して配布資料に載せた。併せて劇上演の際漱石アンドロイドに着せた黒いマントと十字架を同じように漱石アンドロイドに身に着けさせた。こうすることによっていくらかでも漱石アンドロイドが劇の中に取り込まれた状況を感じてもらうことができたのではないと思う。案の定、シンポジウム後の漱石アンドロイドに関するアンケートでは、劇を実際に見たかった、ということを書いてくれた人も少なからずいた。

さてこの私の発表では、まず漱石アンドロイドを実際に見てもらうことがとても重要であった。というのも漱石アンドロイドが夏目漱石に似せて作られた「似せもの」すなわち「偽物」であったとしても、モノとしてそこに実際に存在していることは否定しがたいということを感じてもらいたいからである。ここで私は「モノ」という言葉を使ったが、「モノ」と「人間」の間には違いはあるかもしれないが、実際はそれほどの違いはなく、混同されることもあるのではないと思う。

漱石アンドロイドも有名な文豪であるという点を除くと、今現在でも日常見かける人間と違いはないのではないだろうか。とくに漱石アンドロイドが座位型アンドロイドであり、自立して動いたりはできないという点に着目すると、車椅子に乗った高齢者や障害者の姿と何ら変わることはないのである。漱石アンドロイドを動かすにはかなりの人間の労力を必要とするが、それは車椅子の高齢者や障害者がほかの人の介助や介護が必要な状況と一致する。アンドロイドを作った人にその意識はなかったかもしれないが、自立して動く人間ばかりではないのだという現実を逆に照射するものとなっている。

このようにアンドロイドと人間がクロスするという事実については、全国大学国語国文学会の機関誌『文学・語学』第224号(2019年4月発行予定)で「アンドロイド・AIと人間」と題した私の論文で詳しく論じているので、参照していただきたい。そこでも取り上げているが、アンドロイドの自立していないモノとしてのありようは、例えば夏目漱石の『行人』という作品で「鉢植」に例えられる女の状況と重なる。そこで漱石はお直という女性に「誰か来て動かして呉れない以上、とても動けやし」ないと言わせているのである。

漱石はまさか自分自身がアンドロイドとなってお直と同じ状況になるとは思ってみなかったことだろう。モノ扱いされる人間の状況については、漱石の別の作品である『永日小品』に収められた「人間」にも描かれており、上記論文にも取り上げた。

さて漱石アンドロイドにはまだAIが搭載されていないが、AIを搭載したら、漱石その人がよみがえることになるのだろうか?答えは否である。人間とは複雑な生き物である。様々なデータを入れたところで、漱石の体験や生きた軌跡そのものをデータとして取り込むことは不可能である。そして何よりも人間は時間とともにある。以上のことは上記論文で詳しく論じているので、ぜひご参照いただきたい。

(増田裕美子)

「国語力」をいかに実現するか—— 朝日教育会議における登壇

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 山口 直孝



「国語力」をテーマとしたシンポジウム

朝日教育会議は、朝日新聞社が創刊140周年を記念し、「教育の力で未来を切り拓く」をテーマとして15の大学と連携して展開したフォーラムである。二松学舎大学も事業に加わり、2018年10月13日に第3回シンポジウム「グローバル時代を生きる「国語力」」を開催した。プログラムは、三部で構成され、第1部は、明治大学教授齋藤孝氏の基調講演、第2部は、二松学舎大学特別教授夏目漱石（漱石アンドロイド）の朗読、第3部は、二松学舎大学の教員4名（江藤茂博・荒井裕樹・張佩茹・小久保欣哉）に愛知県立大学准教授で同時通訳者の柚川裕美氏を加え、朝日新聞社教育コーディネーターの一色清氏が司会を務めたパネルディスカッションであった。会場となった中洲記念講堂には、当日約350名の参加者が集まった。

二松学舎大学は、言語運用能力を培うことを重要視している。「国語力」は、教育における取り組みを表わすキーワードである。二松学舎大学では、「たいせつなのは、国語力。」をキャッチコピーとして広報活動を展開している。シンポジウムでは、「国語力」の内実を確認し、「国語力」を伸ばすためにどうすればよいのかが議論された。当然、漱石アンドロイドの朗読も、「国語力」に関連したパフォーマンスとして位置づけられることになる。

漱石が読む『こころ』

漱石アンドロイドの出演は、齋藤教授の講演の後である。登壇に当たっては、一度舞台を暗転させた。自力で動くことができないため、漱石アンドロイドが机に向かって座っている姿が再点灯時に現われる形とした。

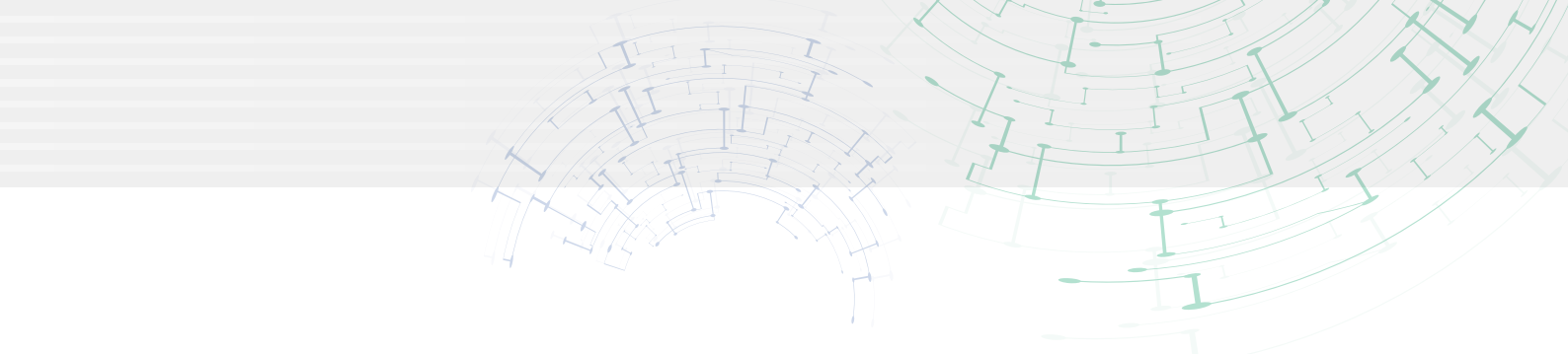
簡単な自己紹介を経て、漱石アンドロイドは、『こころ』の朗読に入った。読み上げたのは、「下 先生と遺書」の四十一、「先生」とKとがやり取りをする場面である。お嬢さんへの恋愛感情に揺れるKに対して、同じく好意を抱く「先生」は、利己的な理由でKを断念させようと画策する。嫉妬心や焦りなど、複雑な感情に揺れる「先生」の内面が表出された当該箇所は、高等学校の国語教科書に掲載されており、周知のものである。「先生」の葛藤を、作者自身の声で聞いてもらった時、作品はどのような相貌を帯びるのか、というのが企画側の興味にはあった。オープンキャンパスや特別授業と同様、朗読に際して『こころ』の自筆原稿をスクリーンに映し出す演出を行った。

参加者は、事前申し込み者に限られていたため、テーマに積極的関心があることが想定される。中高生から70代まで幅広い年齢層の聴衆の反応は全体的によく、会場は緊張感のある静寂に包まれていた。

朗読終了後、山口が「小説と声——漱石アンドロイドが読む『こころ』」という解説を行った。最初にプロジェクトの目的やこれまでの活動に触れ、漱石アンドロイドが生み出す新しい体験のうち、今回は「作者自身による朗読で小説を鑑賞すること」に該当することを述べた。次に、『こころ』の内容を紹介した。本作では、友情と恋愛との板挟みになり、友人の死によって罪意識がいつまでも消えず、伝えられないことで悩む「先生」が描かれている。「先生」の苦しみは、過去にもあり、現在にも続いている複合的なものである。かつて「近代的自我」と呼ばれた内面の葛藤をとらえることが、作品理解の鍵となることを説き、朗読が大きな手がかりとなることに注意を促した。

解釈行為としての朗読

朗読は一つの解釈行為である。早さ、抑揚、高低、間の取り方などの調節によって作品の趣は、まるで変わってくる。『こ



ころ』で今回取り上げた部分には、「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」という有名なせりふがある。元々は、Kから「先生」に発せられた戒めであったが、本文では「先生」から「K」に投げ返されている。さらにその言葉は、手記を書く「先生」によって反芻され、受け取り手である若者の「私」にも響いていく。「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」は、一つの言葉が重層的な意味を帯びることの好例である。四十五歳時の姿の再現を目指した漱石アンドロイドの声は、成熟した人間の風格を感じさせる。高等学校の授業では触れられる機会があまりないものの、せりふには後年の「先生」の思いが込められている。漱石アンドロイドの声は、そのことに気づく上で重要な手がかりとなろう。以上のような私見を語ったが、参加者の表情からはおおむね納得している様子うかがえた。参加者のアンケートをいくつか以下に掲げる（句読点を補った以外は原文のまま）。

- ・こんな声だったの、というのが第一印象です。最近「朗読」の催しが増えているようですが、著者本人が自作を読むのは珍しいでしょうから、面白い企画だと思いました。
- ・話し方や声に違和感がなく、生身の人間から話を聞いている気分になりました。
- ・読むポイント、区切り、淡々と語る口調など朗読を聞くことで想像する力をつけることができると思います。声のトーンなど再現されたと聞き、ただ聞き入ってしまいました。
- ・落ち着いた良い声でした。ただ、個人的にはききとりにくい時もありました。
- ・「こころ」は高校生の時に読んで印象的でしたが、アンドロイドの朗読によってまた趣の違う印象を持ちました。
- ・側に漱石がいるようでおもしろい。ただ広い講堂内では聞き取りづかった。言葉、声のトーンは、漱石に近づけているのでしょうか？

漱石アンドロイドと作る「国語力」

小説は、一人で黙って読むことが普通である。しかし、長い歴史の中で、孤独な受容は、むしろ例外に属する。文学は、本来、声に出すことで場に集う者が集団で楽しむことができるものであった。漱石アンドロイドによる朗読パフォーマンスは、人々の意識を文学の基本に立ち返らせる働きを持つ。また、音声プログラムを作成する過程では、声の複数性に敏感である態度が求められる。他者の言葉がはらむ多義性を読み取ることに心を砕き、理解した内容をほかの相手に注意を払いながら伝えていく。朗読は、表現を鍛える絶好の手段であろう。漱石アンドロイドサークルの学生たちの活動は、「国語力」の模範的な実践例と見なすことができる。

第1部の講師を務めた齋藤孝氏には、漫画家のやくみつる氏との対談をまとめた『国語力』（辰巳出版、2013年6月）という著書がある。本書において、両氏は、知的好奇心を発揮すること、また、未知の対象に向けて働きかけていくことこそが「国語力」であるという、注目すべき見解を披露している。二松学舎大学が目指す「国語力」も、創造を促す言語運用能力にほかならない。

漱石アンドロイドは、漱石であり、アンドロイドである。既知の文学者であり、未知数の領域を持った機械である二つの属性を備えている漱石アンドロイドと関わることは、定型のコミュニケーションを乗り越えていくことを意味する。漱石アンドロイドとの出会いによって、新たな発見をし、漱石アンドロイドに働きかけ、自分を組み替えていく。漱石アンドロイドは、「国語力」の大切さを伝えるだけでなく、実現する媒体でもある。朝日教育会議という明確なテーマを持つフォーラムに参加したことで、漱石アンドロイドの持つ力を対象化することができたのは、一つの成果であった。

第3部のパネリストの一人、張佩茹は、『こころ』の朗読の感想として、「自分は高等教育を受けて、頭の悪くない人間のはずであるが、さっぱり内容が理解できなかった」と発言して、会場の笑いを誘っていた。台湾で育った張は、朝日教育会議で初めて作品と出会った。平易な言文一致体で綴られた『こころ』も、予備知識なしに触れた場合、抽象的で難解な作品でしかない。驚かされると共に、自分たちが無意識に日本人の文脈に依存していることを考えさせられた。「国語力」を考える上で落とすことのできない観点を提供する挿話として、付け加えておく。

「漱石アンドロイドと聞く江戸落語」 実施報告

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 中川 桂



毎秋行われる創縁祭（大学祭）の多彩な催しの一環として、また本学卒業生を対象としたホームカミングデーとも連動して「漱石アンドロイドと聞く江戸落語」という催しを実施した。これは「漱石アンドロイドと落語のコラボレーション」という案が私のところへもたらされたので、漱石先生（アンドロイド）にミニ講演をお願いし、その後に落語を一席聴いてもらおうという企画に至ったものである。創縁祭の初日である2018年11月3日（土）の午後4時30分から5時まで、九段一号館地下二階の中洲記念講堂で行った。実際の集客を考えると大きすぎる会場ではあるが、漱石先生の講演と落語の実演を行う上での便宜を考えてのことである。企画・立案は当プロジェクトの代表者である山口直孝先生によるもので、また実施には研究室助手の伊豆原潤星君の尽力を得た。

プログラムはまず漱石先生のミニ講演からスタートした。これまで漱石先生は常に洋装で登場しておられたが、今回初めて和服姿で登壇された。写真をご参照願いたい、和服姿もなかなかお似合いではないだろうか。

講演で漱石先生は自身と落語とのかかわりなどを話された。以下は、その際の内容である。冒頭の一部を割愛している。（以下、引用）

このあと、落語研究会の方が実際に落語を聞かせてくれるそうです。楽しみです。その前に私の話をしましょう。

落語と私というと、あまり関わりがないように思われるかもしれませんが、私は落語が好きで、よく聞きに行っていました。神楽坂にある「わらだな」（薬店）という寄席へよく行ったものです。小さい頃はむしろ講釈を好んで聞きに行きましたが、中学校からは落語を目当てに通っていました。私の良き友であった正岡子規君とも寄席の話をきっかけに付き合いが始まったのです。

ああ、そういえば、高浜虚子君に連れられて歌舞伎や能なども観に行きましたね。そのうちに虚子君から、正岡の研究会「山会」と言うそうですが、その会へ出すための文章を書かないかと誘われたので、私は一篇書いてみることにしました。こういった経緯で出来上がったのが『吾輩は猫である』です。とても愉快的気分虚子君に差し出したのを覚えています。

話が逸れました。

私は特に柳家小さんという噺家が好きでした。彼は三代目で、私が最後に聞いたのは「うどんや」という話だったと思います。彼は素晴らしい噺家でした。私は『三四郎』という作品にも、彼のすばらしさを書いています。

さて、ここまで落語と私について少しお話しましたが、皆さんと一緒に今日聞くのは、「目黒のさんま」という噺です。私もまた聞けて嬉しく思います。いやー、蘇った甲斐がありましたね。さて、短い時間ですが、今日は最後まで楽しんでいてください。

続いて、舞台転換のつなぎ役として私が登壇し、漱石と落語についてのミニ解説を行った。漱石は上記のような講釈（講談）や落語のほかにも、娘義太夫の席にも通っていた。寄席芸が好みだったことが、のちの文筆や講演の活動にも役立ったと思われる。

漱石の寄席好きは、周囲の友人にも影響を与えた。二松学舎に続いて入学した成立学舎以来の友人である、岡山県出身の橋本左五郎は「田舎から出て来た私が寄席へゆき、講談・落語・義太夫に興味を持つ様になったのは、全く夏目の

影響です。(中略) 円朝の牡丹燈籠だとかは、当時幾度聞いても飽きない程になっておました」と述べている(水川隆夫『漱石と落語 江戸庶民芸能の影響』による)。ちなみに、橋本は一連の談話の中で「漱石は左利きだった」と証言している。

漱石は東京育ちで、幼少時から寄席の文化に馴染んでいた。地方から上京してきた仲間と違い、都会人の娯楽として寄席というのは一般的なもので、現代人が想像する以上に、それは身近な娯楽だったのである。一説では、幕末の安政年間には講釈・落語席あわせて江戸に四百軒ほどの寄席があったといわれており、明治・大正期でも庶民的娯楽として盛んであった。漱石の創作のバックボーンにはそのような落語や講談への下地があるのだから、漱石を深く学ぼうとする人々は、ぜひ落語や講談は聴いていただきたいものである。そして漱石先生も語っていたように、正岡子規との交遊のきっかけになったのも寄席だった。明治23年(1890)の、子規宛の書簡では「当年の正月は相変わらず雑煮を食い、寝て暮らし候。寄席へ五、六回程度参り、かるたは二へん取り候」とあって、さらに神田の小川亭で娘義太夫を聞く、との記載がある。この年の正月休み、漱石は寄席通いとかかるた取りを楽しんでいたことが分かる。

おそらくこの報告書に目を通されている諸氏は先刻ご存知のように、漱石は頑固で気難しい、というだけの人物ではない。講演等では、こんなにちでいうところの「リップサービス」…つまりはお世辞も心得ており、人前で話をするのは上手かったと伝わる。そのあたりには、おそらく落語を通して馴染んだユーモアのセンスが生かされていたはずである。

催しでは講演と解説に続き、漱石が講演「私の個人主義」で話題に出している「目黒のさんま」を、落語研究会の部員で文学部国文学科3年生の幸来亭くいなさんが実演してくれた。落語は十年一日のごとく不変のものではなく、時代に連れて微妙に変化している。「目黒のさんま」も例外ではないが、今回はのちに付け加わったと思しい箇所はカットし、なるべく古風な演出で演じてくれた。おそらく漱石が聴いていたころのものと、そう大きくは異なっていないはずである。

そして落語の終了後、再び漱石先生が登場して結びのことは述べた。終演後には卒業生へのサービスとして、漱石先生と一緒に写真を撮れる機会も設けられた。来場者は一様に満足できたイベントではなかったか。

漱石先生を興味のきっかけとして、こんなにちでも上演され、変化を続けている落語に触れてもらえたならば、この催しも大いに意義があったというべきだろう。最後に、当日は漱石アンドロイドサークルの学生たちが精力的にかかわり、イベントを支えてくれたことに感謝の意を表したい。



「和服姿で落語との関わりを語る漱石アンドロイド」

仕様と用途

——アンドロイドの限界とどう付き合うか

二松学舎大学大学院文学研究科

教授 島田 泰子



本年度における稿者の成果：記録と総括

本プロジェクト 3 年目の本年度、本稿の筆者が関わった漱石アンドロイド“共同研究”関連の成果は、(1)シンポジウム「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？ —偉人アンドロイド基本原則を考える」への登壇（8月開催）、(2)書籍『アンドロイド基本原則 —誰が漱石を甦らせる権利をもつのか?』への寄稿（1月刊行）、(3)言語処理学会（NLP2019 NAGOYA）でのセッション「談話研究と言語処理、人工知能研究の連携に向けて」への登壇（3月開催）、の3項目に集約される。

この3件のうち、(1)は漱石アンドロイドの「発話行為デザイン」を通じたアンドロイド・漱石の「人格デザイン」を巡る議論であった。当日の進行の都合上、事前に用意した内容の一部（漱石の写真や肖像画に留まらず“西郷どん”のさまざまな肖像画やイラストなどを引き合いに出しての、パブリック・イメージに関する後半のくだり）が時間の関係で割愛を余儀なくされたことは惜まれるものの、シンポジウムの趣旨に即して「没後100年が経過する故人（歴史上の人物）をアンドロイドとして甦らせる」ことの課題と注意点を日本語学的な観点から提言し、不用意なデザインによって故人の人格イメージや名誉を損ねる危険性について、具体的な事案に即し改めて警鐘を鳴らした（前年度版の本報告書で稿者担当章において既に述べたこととも一部重複）。その一部を文章化したのが(2)であり、それと一致する趣旨で企画されたセッション（言語学分野で高度な到達点を有するポライトネス理論を初めとする談話研究の成果を、工学分野のHAI（Human-Agent Interaction）研究における擬人エージェントの発話設計に活かすための、分野横断的な情報提供・情報交換を行うことが狙い）へ登壇する運びとなったのが(3)である。

対面実験の当初プランにおけるアンドロイドの“失敬な”発言（被験者の説明に対する再三のダメ出し）が被験者に情緒的な反応を呼び起こす理由について、前年度の本報告書（担当章の第2節に示した項目の3番目）ならびにシンポジウムの段階では、教えを乞うて「教わる」側すなわち受益者側に当たる立場の資格と関連付けて論じた（平たく言えば「お前が言うな」問題）が、書籍化以降はさらに考察を深め、Leech（1983）におけるポライトネスの原理（politeness principle）に即してより構造的に説明を行った。(2)の書籍においては「気配りの原理（Tact Maxim）」並びに「寛大性の原理（Generosity Maxim）」の少なくとも2つに対して違反となることを述べたが、(3)の学会セッション発表においてはさらに検討を進め、Leechが示した6対の原理（Maxim）すべてに対して違反となる解釈が成立することを示した（Leechのpoliteness principleは、山岡ほか（2010）の日本語訳による）。

これら(1)～(3)は、いずれも共通の事案に基づくアウトプットであり、対面実験にまつわる試行錯誤を経て得られた“研究”成果を報告するものであった。1つの対面実験の失敗事例（実験企画者が当初企図した対話効果が実現出来なかったこと）とその要因の分析が、それぞれ趣旨の異なる別の観点からトリミングされることで結果として3つのアウトプットを成立させたことは、本“共同研究”の関係者にとって重要な示唆を持つ。単なる失敗で終わらない価値ある失敗事例となり得るか否かは、「反面教師」的あるいは背理法的に得られる知見が示せるか否かと直結している。もちろん失敗より成功が望ましいのは言うまでもないが、トリッキーな操作や付会の説で形成された空疎な成功譚よりよほど実のある失敗談があること、価値ある失敗に関しては、そこから学ぶものがある（学ぼうとする姿勢がある）限り、成功を装い“成果”を捏ねあげる必要も生じないことなどは、認識として共有されてよいだろう。逆説的に“失敗”は成功（HAI研究など他分野への貢献を果たし得る）であり、同じ意味で“成功”は失敗（心ある人はいかにみえぬ）ともなり得るのであった。

仕様（機能）と用途：アンドロイド運用上の留意点

前節に総括した本年度の取り組みを通じての覚え書きとして、この機会に「仕様と用途」にまつわる課題について書きとめておきたい。講演用に作られた漱石アンドロイドの仕様や講演用に最適化された機能（プログラム）が逆効果になる場面が、予備実験やイベント中に思いがけず観察されたことは、「仕様と用途」の齟齬あるいは不一致をめぐる問題を改めて提

起されたようであった。具体的には、落語鑑賞イベントにおいて会場に流す出囃子に合わせリップシンクが発動したこと、対面実験の予備テスト中に話し相手とは違う方向を「注視」しながら長時間発話を続ける場面があったこと、の2件である。

後者については、講演会場の環境変化に応じた適応的振る舞いをアンドロイドに実装するための工夫が前年度の本報告書にも報告されているが（小川ほか「漱石アンドロイド講演システム」p.29）、センサーシステムによって発生したノイズを感知し音源方向を注視するその無意識ふうの動作が、問題の対面実験の予備テスト中に発動したことで、かえって奇妙な不自然さを醸す結果となった。被験者との対話中に大きな音が発生して一瞬そちらへ首を向けるにしても、生身の人間であれば音の正体が判明すればすぐに視線を話し相手に戻すところであり、一瞥で済まない場合には、マンツーマンでの対話中なら、話し相手から顔をそむけているあいだは発話を中断するのが通常であろう（顔をそむけたまま話し続けるのは、時間の制約や聴衆を待たせるわけに行かないなどの理由から発話を中断できない「講義」「講演」ならではの振る舞い）。「状況や与えられた役割に合致した適切な動作」を実現することでアンドロイドの挙動に自然さを演出するはずの機能が、異なる用途に際して裏目に出た格好となり、かえって不自然な「作りもの」感を増大させる結果となったのは、いささか皮肉なことであった。

前節に記した対面実験も、発話デザイン云々以前に、仕様と用途との齟齬という根源的な問題がある。すでに前年度の本報告書（稿者担当章の第3節）に明言したとおりnonverbalあるいはpara-language要素によって情緒的な情報を伝達出来ないアンドロイドに、至近距離での交流会話を行わせようとしても、面接のような対話にしかならないのは、講演用に作られたその仕様に、そもそも大きな制約と限界があるからである。AIによる擬人エージェントにおいても交流会話（俗に言う「他愛のない雑談」）の実現は最も難易度の高いものとされるが、談話研究の成果に照らして指摘される「会話」成立要件、例えば聞き手による「かぶせ発話」「先取り発話」といった適切な合いの手や傾聴のサインとしてのあいづち（頷きなど非言語的なものも含む）などを駆使して共感的理解を伝えることは、（一方通行の「講演」には必要ないものであり、それゆえ）漱石アンドロイドには一切実装されていない。2度目の予備実験で被験者役を試された夏目房之介氏からは、合成音声用の音素採取に際しての朗読が、そもそも講演用を前提とした「声を張る」発声法であったことや、背筋を伸ばした姿勢や椅子の利用・洋装などといったアンドロイドの造りそのものが、パブリックな立場や場面性を表象する仕様となっていることについて、指摘と教示があった。真に打ち解けた至近距離での対話を実現したいのなら、もつとぼそりと話す低い声の音声を用意されなくてはならず、また生前の漱石の、弟子たちと語らうカジュアルモードの仕様に再現しなくてはならない。具体的な演出としては、内蔵疾患を抱えた漱石の、胃を庇うような前屈みの姿勢や座卓に頬杖を付く気怠げな体勢であり、着衣に関しては明治期の日本人のリアルに即して和装がプライベートかつカジュアルなドレスコードとなる、ということであった（実の孫にして身体表象文化学専攻教授である氏からの誠めには、圧倒的説得力があった）。

既に完成した漱石アンドロイドでは体勢の変更は不可能であり、座卓に着くことはおろか前屈み気味の姿勢も取れないため、実現のためには、全く仕様の異なるアンドロイドを別途新たに作る以外ない（予算的事情からもそれは現実的ではない）。至近距離での対話に用いる漱石アンドロイドは、作るとすれば、可動部分や可動域に始まりアクチュエーターから搭載するプログラムまで、講演用とはさまざまな点で違ってくるだろう。喩えて言うなら、大会場での大がかりなイリュージョン・ショーと至近距離でのクローズアップ・マジックとは仕掛けや技の精度がまるで異なるのと同じ、距離に応じた解像度の違いは重要であり、ズームアップすれば発話行為においても芸の細かい表現手段が要求されることになる。仕様に即した用途に限定して使用する、などの対処については、前述の書籍において既に提言し、また前年度の本報告書においても「制約や限界との折り合い」に関する課題に触れている（稿者担当章の第3節末尾）。再三述べてきたそれらの問題意識をいま一度共有する必要があるが痛感される。

叙上の如く発話行為のデザインは、発言内容に留まらず多岐にわたる細部により総合的に成立するデリケートなものであり、数点の「これさえ真似すれば」という汎用的なコツを求める発想は、来日したアラブの王様が水道の蛇口を欣喜雀躍して買い占めようとするこども向けの寓喩における「これさえ持ち帰って砂漠の真ん中に挿せばたちどころに水が出る」との稚拙な錯誤にも等しい。漱石アンドロイドに対する忌憚りの無い、時に辛辣な意見（本報告 p.22も参照）にせよ、願望通りに会話を弾ませてくれない被験者の反応にせよ、それら“不都合な”アノマリーにこそヒントがあることとあわせて、改めて記しておく。上に触れた圧倒的当事者からの批正も含め、都合良く単純化・矮小化したり無視（除外・隠蔽）したりしない姿勢が“研究者”にとって文・理の隔てなく謙虚な誠実さ（誠実な謙虚さ）として重要であることは、言を俟たない。

（参考文献）山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』明治書院

漱石アンドロイドの拡張とその果て

二松学舎大学文学部
専任講師 足立 元



アンドロイド演劇の成功とその先

人間と人形が並び立つ芝居は、古代ギリシア以来の——あるいはもっと遡ることもできるだろう——長い歴史がある。その歴史の中で、人形は、彫刻ほどの造形表現でないとしても、ただの見られるモノであることを超えて、それを見る人間の内面を揺すぶり、人間が人間であることの意味を再考させるものであっただろう。

2018年に二松学舎大学で上演された平田オリザ演出『手紙』は、そうした人形と人間が並び立つ芝居の歴史を受け継ぎ、さらに文学史を素材として、近代に形成された「日本人」の意識の核心へと迫るものだったといえる。

平田は、日本と西洋、自我と社会といった抜き差しがたい裂け目を、正岡子規（生身の女優）と夏目漱石（アンドロイド）による実際の手紙の朗読からなる対話劇を通して、浮かび上がらせた。つまり、人間と人形のギャップが、日本と西洋の文明の相克に重ね合わされ、本物が偽物に吸い寄せられながらより本物らしくするという複雑なりアリティを舞台上で作り出したのだ。

それは、奇跡といってもいいほどの漱石アンドロイドの見事な活用だった。偉人に寄りかかった見世物として生まれた人形を、見世物の芸術へと昇華してみせたのだから。

とはいえ、芝居は基本的に一つの公演期間で終わる芸術である。漱石アンドロイドを使った芝居を、これから文楽のような洗練された繰り返し上演される芸術へと生きながらえさせることは、現実的ではない。漱石アンドロイドはこの芝居で一つのピークを迎えたのではないか。

あるいは、今後さらなるアンドロイドの製造や技術革新があれば、アンドロイド芝居がひとつのジャンルとして成立することも夢想できるだろうか。もっとも、そもそも人間だけで芝居を続けることさえ極めて困難な道のりなのに、さらにアンドロイドという必ずしも表現に必要なものを用い続けながら、一つの芝居のジャンルを形成していくことは、ほとんど不可能ではないかと思われる。

そこで、ここでは、芸術から離れて見世物としての漱石アンドロイドの活用、すなわち延命を提案してみたい。

漱石アンドロイドの拡張現実

今日の視覚表現における最先端の領域のひとつに拡張現実があり、その一種として裸眼で体験できるプロジェクションマッピングを挙げられる。夜の東京駅、Perfumeのライブ、新しいコピー機の発表会など、この技術を使った公演や展示は、大きな驚きをもって迎え入れられている。また、チームラボやライゾマティクスのように、芸術表現としてプロジェクションマッピングを追求しているアーティスト集団もいる。

ならば、文学研究のアウトリーチとして、プロジェクションマッピングを用いてもよいのではないだろうか。単に平滑なスクリーンに映像を上映するのではなく、漱石アンドロイドの周りにプロジェクションマッピングで近代文学史の再演を行うのである。三次元の実物としての迫力を持ったアンドロイドと、二次元ながらも時空を超えた壮大な視覚体験が可能なプロジェクションマッピングによって、これまで頭の中で想像されてきただけの近代文学史の場面が、現実以上の刺激をもって現れるだろう。

プロジェクションマッピングによって、漱石アンドロイドが単体の人形から無限の舞台を持った人形へと変わる。例えば、漱石アンドロイドの周囲にある舞台は、東京の自宅風景から始まり、回想のモノローグとともに舞台はロンドンの薄汚い小さな下宿に変わり、さらには漱石の小説世界の中へと入っていく。現実と歴史と物語が入り交じるのだ。プロジェクシ

ンマッピングを用いれば、アンドロイド自体はわずかな動きしかできなくとも、目まぐるしく動く背景場面、漱石のテキストに基づくモノログ、効果音などによって、引きずり込まれるような展示となるはずだ。

プロジェクションマッピングは、大講堂で数百人を前にして行うイベント用のプログラムに加えて、小さな部屋で数十人までを前に行う常設展示用のプログラムもあればいい。現在のところ、普段の大学構内で漱石アンドロイドを見るための物理的な施設が存在しないが、プロジェクションマッピングによって、新たに壁や什器を作ることなく見せることが可能になる。

もっとも、こうした演出を行うには、単に予算が必要というだけではなく、平田オリザのごとく、文学史をふまえたうえで、それをなぞるだけではない創造性が求められるだろう。たとえプロジェクションマッピングが芸術ではないアウトリーチの見世物だとしても、凡庸な演出であれば、どうしても面白くないように思われる。

漱石アンドロイドからヴァーチャル漱石へ

さらなる漱石アンドロイドの延命として、プロジェクションマッピングの次に考えられるのは、身体としてのモノから脱皮したヴァーチャル漱石だろう。漱石アンドロイドの制作の過程で得られた知見をベースに、細部に至る3Dのデータ、音声のデータ、行動のデータを集め、それらをオンラインの中でAIとともに再現し、インタラクティブに鑑賞するというものだ。モノとしての迫力だけは欠けていても、ディスプレイ越しに、漱石の有り様が再現される。

そのデータの内容は、研究の進展によって常にアップデートされ、より実物（と考えられる）漱石のキャラクターに近づいていく。それは文学研究のアウトリーチをはるかに超えて、偉人の姿や思考や言動をほぼ完璧にオンラインのキャラクターで再現するという実証研究として、有意なものとなるだろう。

ヴァーチャル漱石の鑑賞は、スマートフォンやパソコンで行うことができ、個人的な体験に留まらず、SNSを通じて、多言語に翻訳されて世界中で共有される。それは文学鑑賞の入口になるばかりでなく、漱石像の視覚化・国際化をアップデートさせることは、日本の国際化を進展させることにもつながる。

さらに悪夢のようなことを述べるならば、ヴァーチャル漱石は、リアルな夏目漱石に関するイベントとともに、参照されたり批判されたりしながら、存在感を増していくだろう。例えば、夏目漱石に関するテレビ番組にヴァーチャル漱石が出演するのはもちろん、渋谷のスクランブル交差点の巨大ディスプレイにヴァーチャル漱石が出現して人々を驚かせる、ということも考えられる。

ちょっと空想が膨らみ過ぎたかもしれない。だが、空想の中にあるヴァーチャル漱石よりも、現実のモノとしての強みを持っている漱石アンドロイドのほうが、今は未来を見せてくれる。再び、アンドロイドの話に戻ろう。

漱石アンドロイドはいかに死すべきか

すでに古いものは、それ以上古臭くなることはないが、新しいものは古臭くなる。プロジェクションマッピングは、今は漱石アンドロイドの活用として最も有望な手段に思えるが、おそらく10年後には古臭い技術となって、昔あんなしょぼい技術があったよねと懐古されるだろう。

おそらく、漱石アンドロイドそのものも、その運命から逃れられない。モノとしての耐用年数があり、関心を引く珍しさの耐用年数もある。実はもう寿命の折返し地点を過ぎているのではないか。しかし、アンドロイド研究のまだあまり開拓されていない課題として、偉人アンドロイドはいかに死すべきかという問題を、漱石アンドロイドが示してくれるように思われる。

夏目漱石はアンドロイドとして存在しながら、同時に亡くなった偉人として追悼されている。文学的な比喻を用いるならば、このアンドロイドは生と死後の生を同時に生きる、つまり二重の生を生きているのだ。とはいえ、すでに死んでいるものは、人間よりも意外と短い耐用年数（寿命）の後、どのように死すべきか。すでに追悼されているものをさらに追悼するのは喜劇的ではないか。

アンドロイドに葬式はそぐわないとすれば、それは記憶の風化の陰で、ただの産業廃棄物となったり、あるいは解体されて他のアンドロイドの資材となったりするのかもしれない。いずれ漱石アンドロイドが消えるとき、わたしたちは人間の死が死であることの意味を深く考えさせられるに違いない。

学生による 漱石アンドロイドの運用



二松学舎大学大学院文学研究科

助手 阿部 和正



二松学舎大学大学院文学研究科

助手 伊豆原 潤星

1、アンドロイドサークルの概要

漱石アンドロイドサークルは、教育にアンドロイドを活用するという目的のもと、学生が主体となって漱石アンドロイドを運用し、夏目漱石の作家像や、アンドロイドと人間の違いなど様々なことを実践的に考えていくという組織である。授業や講演と並行したアンドロイドの教育活動の柱と言えよう。

最初に、アンドロイドサークルの位置づけについて記しておく。アンドロイドサークルは、二松学舎大学の教員で構成されるAcademic Research分科会(以下、AR分科会)の下部に位置づけられるものである。そのため、通常の学生サークルとは性質が異なり、予算や活動内容など、そのすべては最終的にAR分科会の裁可を受ける形で進められている。これは、先述したようにサークルは教育活動の一貫として行われているためである。とはいえ、教員が指示し学生がそれを受けて行動するという形態ではなく、学生が漱石アンドロイドを用いた企画を立案し自分達で運営していくという学生の主体性を重要視した活動形態をとっている。教員は、場合によってはアドバイスをし、学生の活動が円滑に進められるようサポートする補助的な役割を担う。漱石アンドロイドサークルとは、教員にとってはアンドロイドを使った教育効果を測る場、学生にとってはアンドロイドを素材に様々なことを考える場と言えるものである。教員と学生の関係性が単純な一方通行ではなく、漱石アンドロイドを媒介に双方向となっているという点に、漱石アンドロイドサークルの特殊性・先進性が表れている。

漱石アンドロイドサークルの発足は、2017年度に遡る。初年度は、アンドロイドの操作レクチャーや実験参加などを通じて活動基盤を整えることに専心し、2018年度から積極的な活動が開始された。「漱石アンドロイドサークル」という名称は、活動を始めるにあたって便宜的につけられたものであった。現在でも募集ポスターには「漱石アンドロイドサークル(仮)」と書かれている。今年度活動を進めていく中で、所属学生間で名前についてミーティングが行われ、「漱石アンドロイド研究会」という名称が正式なものとして決定した。漱石アンドロイドを単に操作するのではなく、「研究」という姿勢が名前に示されている。ただ、「漱石アンドロイドサークル」という名称は、通称として今後も使用していく予定である。本報告書においても名称を「漱石アンドロイドサークル」で記述する。

現在、アンドロイドサークルの構成人数は16人(内訳:1年生6名・2年生1名・3年生8名・4年生1名)である。活動日をメンバーの時間割に合わせて週3回(水6限・木2限・木6限)設け、そのどれかに1回参加するという形で行っている。基本的な活動内容は、音声の作成、動作の作成、台本の作成、漱石の伝記的調査、新企画の立案などである。漱石に関心がある学生は伝記的調査を担当し、プログラムに習熟した学生は動作プログラムを担当、文章力のある学生は台本の点検を行うなど、それぞれの関心領域や技能に沿って中心的な役割を果たすメンバーをおき、その学生を中心に活動を行う分業体制で活動を進めている。

本年度は、8月と9月の2回のオープンキャンパス、9月の大学1年生向けの必修授業、10月の朝日教育会議、11月の創縁祭・ホームカミングデーの計5回のイベントにおいてその成果を披露した。また、大阪大学および二松学舎大学の心理実験のプログラム作成にも携わっている。オープンキャンパスと1年生向け必修授業と朝日教育会議では、『こころ』の朗読を行った。創縁祭・ホームカミングデーでは、落語研究会とコラボし、漱石アンドロイドが漱石の落語体験を語った後、

中川桂教授が解説をし、落語研究会部員が『目黒の秋刀魚』を披露するという企画を立案・運営した。大阪大学・二松学舎大学の心理実験においては、漱石アンドロイドの発話内容の作成を手がけている。イベントでは毎回アンケートをとっているが、学生が運営しているということも含め概ね好意的な評価が多く、すべて成功裡に終わった。以下、それぞれのイベントについて詳述する。なお、1年生向け必修授業および創縁祭・ホームカミングデーの当日の状況については、詳細な報告(20ページ、28ページ)を参照されたい。



活動風景

2、『こころ』の朗読イベント

2018年度、最初に取り組んだのは、『こころ』の朗読作成である。入試課から8月19日・9月23日のオープンキャン

パスで漱石アンドロイドの講演を行ってほしいという依頼があり、そこでの披露を第一目標に年度前半は活動を進めた。

オープンキャンパスに向けて、まず行ったのは、朗読する題材の選定である。オープンキャンパスということで、メイインターゲットを高校生に絞り、中学・高校の国語教科書に載っている漱石作品を網羅的に調査して検討が重ねられた。その結果、教科書に最も多く採録されている『こころ』を朗読する運びとなった。次に問題になったのは、『こころ』のどの部分を朗読するかということである。候補としてあがったのは、先生が自殺したKを発見する場面と、先生がKに「精神的に向上心のないものはばかだ。」という場面の2つであった。最終的に「精神的に向上心のないものはばかだ。」という場面が選ばれたが、その理由としては、先にあげた、現行の国語教科書の殆どに採用されている部分であることに加え、多くの人の記憶に残っている印象的な箇所であることがあげられる。また、「先生」の語りには複数の声が重なっていることを朗読を通じて明らかにしたいという狙いもあった。

朗読プログラム作成の下準備として、日本語学を専門とする大学院生に日本語の音声的構造など専門的見地を踏まえたTTS（音声作成ソフト）の操作レクチャーをしてもらい、感覚だけでなく論理的に音声作成ができるようにTTSの操作練習を行った。また、市販されている『こころ』の朗読CDを聞いて、どのように朗読されているのかを実際に確認するといったことも行った。

『こころ』の朗読プログラムの作成を実際に始めると、予想以上に時間がかかり、手間取った。TTSは、入力した文章のイントネーションを自動で判断し音声化してくれるソフトだが、精度が完璧ではなく、手動修正を迫られることが多い。さらに、小説の朗読は、間や強弱など細かい調整が生じるため、通常の文章に比べてより手間がかかる。人間らしい喋りに近づけるには、単純なイントネーションだけでなく、リズムやつなぎ言葉、間など様々な要素を調整しなければならないのである。また、小説の朗読では、文章をどのように解釈するのかということも大きな問題になってくる。作業を始めたばかりの頃は、90分の活動時間で1行しか作成できないということもあった。この問題は、注意点や発見をメンバーが記入するノートを作って共有し、メンバー間に共通した「漱石アンドロイド像」を形成することで解決した（現在では、90分の活動時間で、10行程度の文章の音声プログラムを作成することができるようになっている）。『こころ』の朗読プログラムの作成にはメンバーの試験期間を挟んだため、かなりの時間を要し、GW明けに始めた音声作成が完了したのは8月のお盆明けであった。

音声プログラムが完成したあとは、動作プログラムの作成が待っている。漱石アンドロイドの動作プログラム作成とは、作成した音声プログラムの内容に合わせて、既存の動作を当てはめていく作業である。「5秒後にAという動作を行う」というような内容を実際に漱石アンドロイドを動かしながらプログラミングしていく。今回の朗読は、作者が朗読するという体をとるため、抑制的な動作を心がけた。作家は俳優ではないため、大げさな身振り手振りで朗読することはないだろうという判断である。また、人前で朗読する時、通常の間は適度なタイミングで観客のほうを見るということを自然に行う。しかし、漱石アンドロイドはそのような動作をプログラムで指定することが出来ない。そのため、操作を担当するメンバーが適切なタイミングで視線を手元の本から手動で観客に上げることで再現を図った。文章の内容によって視線を手動操作

することで、より人間らしく見えるよう工夫をこらしている。

音声・動作プログラムの完成後は、漱石アンドロイドの演出が次の課題となる。まず、漱石アンドロイドをどのように登場させるかということが議論された。大学の講堂には緞帳がないため、これまでの大学のイベントでは、パーティションを複数枚並べて漱石アンドロイドを登場させていた。だが、今回は、より観客に強いインパクトを与えるために、舞台を暗転し、その間に黒い布で覆った漱石アンドロイドを舞台中央に移動させて、明転すると漱石アンドロイドがいるという演出を行った。また、舞台暗転時に観客に拍手を促すことで、観客の期待感と一体感を高めることを狙った。

さらに、朗読時の照明も細かな調整を施した。漱石アンドロイドは、寒色系の光を当てると肌の質感が目立ち、アンドロイド感が強く出てしまう。そのため、暗めの柔らかい光に調整し、漱石アンドロイドの顔に陰影が浮かぶようにした。漱石アンドロイドは動作源のエアコンプレッサーの関係で常に若干動いている。そのことで、漱石アンドロイドの顔にかかる影が一定にならず、漱石アンドロイドの表情が多彩なものであるかのような印象を観客に与えることができた。また、登場・照明の演出に加え、小道具として、水やマイクを置くといった細かな演出もしている。漱石アンドロイドは、単に音声・動作プログラムを作るだけでなく、演出も含めて考えることによって、よりリアルな存在感を獲得するのである。

オープンキャンパスは、「よみがえった漱石——『こころ』の朗読会」と題し、8月19日・9月23日両日とも、①漱石アンドロイドについての説明、②学生によるアンドロイドサークルの紹介、③漱石アンドロイドによる「自己紹介」及び『こころ』の朗読、④学生による『こころ』解説、⑤写真撮影会というスケジュールで進めた。全体の進行は、伊豆原助手が担当した。『こころ』の学生解説は文学部3年生の大川香苗が担当した。8月は133人・9月は76人の来場者があり、漱石アンドロイドが動作を停止するなどのハプニングがありつつもイベントは盛況に終わった。

大川による『こころ』の解説は、朗読プログラム作成時の本文解釈を踏まえたもので、同時代資料を駆使して小説の構造を丹念に分析したものである。オープンキャンパスで行う朗読イベントである以上、在学生がどのように文学を研究しているのか高校生に示すという狙いであった。大川による発表は、作家そのものの再現である漱石アンドロイドに真摯に向き合うことで作家を神格化することから解放され、逆説的に作家イメージに縛られない豊かな研究を生み出した好個の例であろう。『こころ』の朗読を作り上げていくなかで確信したのは、新しい時代においては新しい研究方法が求められ、漱石アンドロイドもその新しい研究方法の一つになるということである。漱石アンドロイドは、作家神話を再構築するもの

のではない。むしろ、作家神話を解体し、既存の作家研究に新たな光を与える存在と言えるのではないだろうか。『こころ』の朗読を聞いた観客のアンケートには、「想像していた漱石の声とは違った」という意見が散見された。漱石アンドロイドの「声」が生み出す読者それぞれの漱石イメージと漱石アンドロイドのズレは、自身のもつ作家イメージが曖昧なものであるということに改めて目を向けさせるきっかけとなるだろう。アンドロイドサークルでは、今後も漱石作品の朗読を積極的に作成していく予定である。次の小説は、『吾輩は猫である』を考えている。『こころ』の「先生」とは異なる、漱石と重ならない「猫」という語り手を観客はどのように受け止めるだろうか。



『こころ』の朗読場面

3、創縁祭・ホームカミングデーにおける落語イベント

2018年11月3日、創縁祭でホームカミングデーと共同で漱石アンドロイドによる落語イベントを実施した。当日の詳細な報告は、中川桂教授の担当したページ(28ページ)を参照されたい。ここでは、準備段階でどのようなことを行ったかを記述する。本イベントでは、アンドロイドサークルは、漱石の発話部分の作成・演出を担当した。当日の大まかな流れは、

漱石アンドロイドが登場して漱石と落語の関わりについて語り、次に中川桂教授が漱石と落語について解説し、次に落研部員が『目黒の秋刀魚』を演じ、最後に漱石アンドロイドが挨拶をして終わるというものである。漱石アンドロイドが語る部分については、水川隆夫『漱石と落語』（平凡社、2000年5月）を基本文献に、漱石の残した文章や周りの人間の証言などから落語と漱石の関わりについて資料を集め、台本を練り上げていった。漱石アンドロイドが語る内容は、基本的に夏目漱石の伝記的事実に基づく必要があるためだ。このような伝記的事実の調査を通じて、メンバーは夏目漱石について多くの知識を獲得していった。

次に、漱石アンドロイドの衣装について述べる。今回、落語イベントということで、漱石アンドロイドに着物を着用させた。使用した着物は、伊豆原助手の私物である。漱石アンドロイドは下半身が椅子に固定されているという機構上、全身に着物を着ることができない。そのため、上半身に着物を法被のように羽織らせ、下半身は膝掛けで隠すことで対応した。また、漱石アンドロイドが着物を着たときに立体感を見せるために、紙をくしゃくしゃにしたものを肩に数枚挟むという工夫をした。布を使用しなかったのは、重みなどで動作に支障をきたさないようにするためである。着こなしも、明治の男性の着物の着方から逸脱しないよう注意を払っている。

登場の仕方だが、イベントの進行上、漱石アンドロイドの出入りが多いため、今回はパーティションを用いた。ただし、登場時は、落語さながらに出囃子を用いた。曲は、シンセサイザーを持っているサークルメンバーに擬似的に三味線の音で作成してもらった『ねこふんじゃった』である。今回は、落研部員にも、漱石アンドロイド同様にパーティションを用いた登場をお願いした。アンドロイドと人間を同じように登場させることで、両者を等価であるかのように見せるという演出である。

これまで卒業生にアンドロイドの講演を聞いてもらう機会はなかったのが、今回、後輩である在学生在が企画・運営した講演が出来たのは、意義のあることだったと考えている。

4、来年度の展望

2018年度は、『こころ』の朗読プログラムを披露する機会が多くあった。当初はおぼつかなかった作業も次第に慣れ、上達していった。毎回回収したアンケートは、すべて目を通し、書かれた意見を参考にフィードバックを重ねている。回を追うごとに、朗読の調子も演出もより良くなっているという自負がある。それも、サークルメンバーそれぞれが主体的かつ積極的に活動に参加してくれたからである。彼ら一人一人の頑張りによって、今年度は多くの成果を残すことができた。

2019年度は、以下の6つを目標に掲げている。1つ目は、昨年同様にオープンキャンパスでの講演。次回は『吾輩は猫である』を朗読する予定である。2つ目は、YouTubeに『こころ』の動画をアップロードすること。3つ目は、漱石アンドロイドのWikipediaページを作成すること。現在、すでに着手しており、年度前半には公開したい。4つ目は、LINEスタンプのリリース。現在、メンバーが漱石アンドロイドをイラスト化したものがあり、それをLINEスタンプ化するという計画がある。5つ目は、アンドロイドが登場する作品についての論集作成。アンドロイドサークルのメンバーは、世界で最もアンドロイドに関わっている人文系の学生と言える。そんな彼らが、小説や映画や漫画など様々なメディアに登場するアンドロイドをどのように論じるのか。現在作成中だが、それなりの強度と密度を持ったものが完成するだろう。6つ目は、漱石山房記念館での講演。ここは漱石の書斎が再現されている。ここで漱石アンドロイドの講演を行いたい。漱石アンドロイドの講演と、近代文学専門の教員による講演を併せて行うことも考えている。これ以外にも、SNSの開設や怪談イベントの実施など様々な案がメンバーから出されている。

最初書いたように、漱石アンドロイドサークルとは、漱石アンドロイドを媒介に学生が様々なことを考えていく場である。アンドロイドがここまで学生にとって身近なものとなっている大学は、世界でも稀だろう。アンドロイドは技術的には理工系が作るものだが、その存在そのものについて考えるのは人文系の仕事と言えよう。漱石アンドロイドサークルをきっかけに、サークルメンバーだけでなく他の学生も漱石アンドロイドという存在に興味をもち、そこからさらに新たな思考へと連鎖していくという流れを作りあげることができれば、大学教育として大きな意味をもつのではないだろうか。



漱石アンドロイドのイラスト

「漱石アンドロイド」プロジェクト 2018年度 共同研究報告書
2019年3月31日初版第1刷発行

編集兼発行者 二松学舎大学 漱石アンドロイド運営委員会

印刷社 株式会社 サンワ

発行所 東京都千代田区三番町6-16
二松学舎大学
TEL：03-3261-7407 FAX：03-3261-1291
URL：http://www.nishogakusha-u.ac.jp/



学校法人二松学舎

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16 TEL 03-3261-7407